論理的命題とも亦は修辭學的命題ともなる。「宗敎は幸福の基」は論理的の者で「信の樂み」は修辭學的命題である。前者は統一と、思想の連續と論證的勢力とを有し、後者は取扱に千變萬化の自由を與へ、證明にあれ、應用にあれ、感激を挑發するの發言にあれ、欲するがまゝの叙述法を取るの便利を有つて居る。說敎者は其人の敎育の程度と性質の如何とに從ひ、右のうち何れかを選ぶに至るものである。己が好む處は何れであるとも、自分の進步の爲め、又辯說の變化を保たんが爲に、他方をも時々用ゐなければならぬ。時としては同一の辯說の內に兩方の形式を用ゐる事が出來やう、乃ち己が主題を告ぐるに當り「宗敎は幸福の基」即ち「信の樂み」と云ふ事も出來やう。論理的なるものに一の變化を與へんとせば疑問的の形式を用ゐるのである。これ其命題の眞僞を決するは聽衆の判斷に一任するが如く見ゆるが故に、又聽く者は說敎者が之に與へる處の答案は果して如何なるものであるかを豫期するが故に、注意と興味とを喚起するものである。或場合に於ては證明することをなさず、單に研究の問題を示す方が適切である。否定と肯定との兩面より論じ得べき問題にありては疑問的命題の形式を取るが殊に便利である。「例へば說敎の主題が敬虔の證と云ふ事であるならば、之を論ずるに當りて五六點に別けて不完全な證據、若しくば僞の證據は是々であると敎へ、然る後滿足なる證據は如斯ものであると擧ぐることを避け、先づ疑問を發し敬虔の眞正の證據は何んであるかを問ふ方が更に適當である。此問題に答ふるに當り、その假設的證據の當てにならぬ理由を敎訓的に述るもよし、若しくは諸種の問題を發し、如斯性質、如何行爲は果して眞正の證據なりや、如斯ものは如何など丶問を起し然る後に眞正の證據を示す事も出來る」。

命題即ち問題の叙述は遺漏なく(論究せんとする一切のものを包括する樣)明瞭、簡潔にして人の心を引くが如きものでなければならぬ。時には形式を更へ、或は同意義の他の言葉を以て反覆するもよからう。かくして漸々叙述を重ね來り、其事柄の深底を穿つが如き正確不動のものに至つて終るのである。教授フエルプスは甚だ綿密なる注意を以て命題を論じかく云ふて居る、『命題、命題の研究、命題の叙述、且又命題を仕上げて精巧緻密なる形態となす事は講壇辯說の最も緊要なる一部である。命題は其形に於ては一個の破片に過ぎないが、其下に横はる處の思想全體の目次となるものである』と。

(三)辯說の構案の內には區分も包括されて居るが、區分の數、その性質、その順序並に之が一般の取扱は如何にすべきであるか。

(イ)有力なる辯說に必要なるものは確かに二つある。即ち既に論じた如く構案と進行とを有すべき事である。此二つの要件を調和しなければならぬ。進行はさながら訓練なき騎兵の如く不規則、亂暴ではならぬ。又秩序ある構案には進行を妨ぐる樣な障害物や停滯があつてはならぬ。のみならず辯說は一個の藝術として、其關節が如何にもあり〳〵と見え、又は其各部分が離れ〳〵に、如何にも目立つ樣なものではいかぬ。宜しく凡てがよく釣合つて居て一全體を爲すものでなければならぬ。ギリシヤ、ローマの辯說者等は演說につき藝術上の仕上にのみ氣を奪はれ、又之が準備のために費した勞力を成るべく隱さん事を努め、明晰なる區分を作る事は少なかつたが、何時も一定の構案に從ひ順序を追ふて進行した。尙ホレースが詩歌に就て云へる如く秩序の力と其美とを得んとせば、其瞬間に云ふ可きを其瞬間に云ひ、其他を暫時延期しなければならぬ。基督教々父等の說教は大に之と趣

を同ふしたものであつた。然るに中世の學徒は哲學幷に宗教上のあらゆる問題の上に、極めて細密なる論理的分解を施し始めた以來、之が習慣となり其後說教も此の風を踏襲するに至つた。青年說教者等が書籍に於て讀む所又學校に於て聞く所は、矢張此種の綿密な分解的の議論のみなるが故に、彼等は教室に於ける研究法を講壇に適用するの誤謬に陷たのである。かくて人々の渴望する處は分解的のものとなり、明晰なる區分と論理的連絡とのみをこれ事とし、之が爲めにはあらゆる雄辯上の步調と審美上の調和とを犧牲にするに至つた。近頃の說教で此の弊に陷つて居らぬものは少ない。その問題の分解的解釋と巧なる議論のみを重んじ、活氣ある信仰と實際的の力と、又簡潔、自然などを比較的に顧みざるに至つた。說教者、殊に教育を有する者等は人々を促して相當の感情と決心と行爲とを爲さしむべき任務を有するにかゝはらず、單に教示と確信とを與へる事のみにて己が任務は足れりと考ふるに至つた。一度かゝる習慣が成立するや、他の實際的で且つ極熱心な多數の說教者等も亦此習慣に從ふ樣になつた。併し此人々も今は全力を盡して此缺點を矯正せんとして居る。

二世紀の昔英佛兩國に於て形式的區分や、形式的小分の數を極端に多くする風が廣く行はるゝに當り、フエネロンは此の風習に反對し盛んに之を駁擊し促すに古の辯說家が取つた方法にかへらん事を以てした。其後此問題に對する著者等の見解は一定して居らぬ。併し佛獨に於ても、亦多少英米に於ても、區分に關し、又一般の順序に關し、一種の形式に從ふ習慣が普通に行はるゝ樣になつた。ラグビーのドクトルアーノルドなどは說教に區分を作るべきものではない、宜しく形式立ぬ演說とすべきものであると主張し、自ら之が模範を示した。其後

英國教會に於ける多數の說教者等は、トレンチ、キングスレー等を始とし、之を踏襲するに至つた。然れども此處に注意すべきは、近世英國教會說教者中に最も廣く人々に賞讃せられたる二大說教者なる、ロバルトソン併にリッドンは其都度區分をなし、又通例辯說中に其區分を公示した。又前者はその區分を豫告し數多き小分をも明示した事も度々あつた。ジョン・ワットソン博士(イアンマクラレンとして廣く知らるゝ)は云ふた、說教は色々な項目に分つ可きものであるか否やは大切な問題であると。三個の別々の小說教は一つの說教とはならぬ。之に反して種々の材料の幾分かを、題詞を以て連結したのみでは、組織ある一體とはならぬ。要する所は諸の項目が進行し發展し漸層を爲して居るか、又は各々相孤立し其間に何等の連絡もなく徒に並行するのみであるかと云ふ問題である。其項目はさながら鐵扉もて密閉された防水室の如くで、一室より隣室に通過する事のかなはぬ風のものであるか、又は一個の塔の如く階段を登るに從つて益廣大なる景色を眼中に收め絕頂に達せずんば止まぬと云ふ風のものであるか。項目を作るは一時の流行であつたが當今の流行は項目に別けぬ事である。然れども之に反對な現象も決して力がないと云ふことは出來ぬ。人は休息場と分岐點を好むものである。

此等の原理と事實とに基き、我等が到達する處の結論は何んであるか。區分を明瞭に示す事は必ずしも必要ではない。之がなくとも容易く了解さるゝ如き構案には區分は不用である。然し說教者が此點に付きて記憶すべきことは、其構案が自分には明かなものであつても、もし何等かの注意を與へずば聽衆は其移り目に氣が付かないことがあるかもしれぬと云ふ事である。かく必しも必要とは云へぬが、一目

瞭然たる區分は、思想の進行を聽衆に明示するばかりでなく、說敎者自身に取りても有益である。即ち之は論理的の正確と準備上の完全とを得せしめ、又草稿を用ゐずして說敎するに當り之が記憶の輔けとなる。區分を爲すべきや否やは其說敎の如何によりて定めなければならぬが、先づ通例は區分をなす方がよい。區分は何の程度迄告示すべきか、又新しき項目に入るに當り之を明示する方法如何などは其場合によつて定めなければならぬ。殊に說明を要し議論を要する問題ならば、明瞭に區分を述べ又時々小分をも述ぶる事が有益であらう。然れども此等の區分を餘り數多く擧げたり、之が爲めに全体としての釣合を失つたり、又は眼目たる實際的の目的を達するに、必要なる思想の漸進を害したりしてはならぬ。

アレキサンダー氏は「辯說を組立るに當り論理的の分解や順序などに拘泥し、其方式と言葉遣に於て利する所ありとするも、從つて其速度、其分量、其勢力に於て失ふものである」とてフェネロンの說に首肯して居る。併しアレキサンダー氏が此判斷を下したるは中世紀に於て、能き訓練を受けたる頭腦を有し、論理的秩序を以て論ずる人々を見て云ふたのである。かゝる時代に於て、人は規則正しき方式に倦み、之より遠ざかる事を以て快事となし、自ら自然的の順序に依らんとするの念慮切なるが故に、如斯見解を執るに至れるも亦恕さねばならぬ。然しながら大抵の人々、殊に靑年に取りては、之は丸で別問題である。恐らくは此忠告は此種の人々の爲に與へられたものではなからう。

又時々聞くことは、當今世上の辯說家等は辯說に形式的區分を設けないと云ふ事である。然し實際は其人々も區分を設けて居る。殊に大群衆に對して大演說を爲すに當りては、問題に入るに先だち、それよ

り論述せんとする諸項目を前以て告げる事もある。辯護士、政治家などの演説の多くは必ず其問題の由來と性質とに從ひ議論の順序を定めたものである。

(ロ)區分の數に關しては簡潔と、明瞭と、變化とを計らなければならぬ。簡潔ならんには出來得るだけ其數を少なくするが可い。又多の場合に於て、二つに分ける事は最も自然である。ヴヰネーはボスエイに就て、『氏はフェロンと等しく兩斷法を好めり、我が判斷によれば二部區分法は通常最も趣味に富めるものなり』と云ふた。併ながら一定不動の規則としては、二重排列法は變化を充分に表すに足らぬ。既に云へるが如く、具體的な又は特種の思想に一目瞭然にして興味ある區分を施すは至つて望ましき事なれども餘り少ない數に引き縮める時は極概括的となり、抽象的となるが故に、更に區分の數を增加しなければならぬ。「例へば福音宣傳の光榮は何に基くやと云ふ問題を取り、左の如く別けたと假定しやう(一)之が爲めに神子基督の召を蒙りたるが故(二)神の聖旨を知らしむるが故(三)神の恩惠の約束のあるが故(四)神の力によりて之を宣傳するが故(五)神の祝福を受くるに至るが故(六)人々の靈を神の前に導くが故。此區分は更に簡潔する事が出來やう。即ち(一)創設に基くもの(二)其問題に基くもの(三)其働と其結果に基くものと。けれども前者は人の注意を引く事多きが故に却て之を採るべきものである」。然れども區分の項目が五個或は六個の數に達する時は、其順序は、滔々連綿として滯なく流れ出でなければならぬ。さもなくば普通の聽衆は之を容易く記憶する事が出來なからう。此故に熟練な説教者は辯説を四項目以上に別ける事は殆どない。

かく考へ來れば、最大多數の説教が三部分より成る理由を發見する事

が出來やう。或る問題を論じて平凡に終ることを指して『說教のやうな三區分』と云ふは長き觀察に基く事であらう。成程多くの說教者等は、單に習慣上、即ち盲目的に習慣に從ふと云ふ處から、必要もなきに三區分しやうと勉めたであらう。然れども此習慣の發生したのは何等か當然の起源を有するに相違ない。其主なる理由は以上擧げ來つた構案によりて知らるゝ如く、三區分は注意を離散せしめず、又記憶をも害せず、丁度よき程の變化を與へるのである。又我等は之と相似たる事實を諸方面に於て發見するのである。辯說の極く普通なる組立は「何事か、何故か、夫からは」の三つ、即ち說明、證明、應用とするは極く自然であらう。推理式は三個の命題より成つて居る。少なくとも三段がなければ漸層はない。三は完成の觀念、即ち始、中、終の觀念を與へる。競走の時の出發の掛聲は「一、二、三」ではないか、之よりも多い事もあるまい。聖書は又屢々三度反覆する事を以て最も重きこと、力ある事として居る、例へば聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな。尋ねよ、求めよ、叩けよ、などの如きである。其數を三となすべきは論理學上並に修辭學上の理由に基く事がある。例へば復活は(一)可能的であり(二)蓋然的であり、(三)確實であるとか、宗教を日常生活に應用する事は(一)可能であり(二)嘉すべくあり(三)當然なすべきの事であるとか、信仰は青年に取りて(一)重んずべき事(二)望ましき事(三)爲すべき事であるなどの如きによりて知る事が出來やう。フエルブスは三つに區分する事は中世紀の說教等が三位一體を尊まんとせし希望より起つたものであると考へて居るが、疑ひもなく此理由も幾分かあつたのであらう。以上の如く考へ來れば、精巧なる辯說が屢々三に區分されると云ふ事は偶然な事でもなく、亦敢て不思議な事でもない。かく三區分は餘り普通であるから

と云つて之を避けんとする考へが起るかもしれぬが、吾人は必要な場合には遠慮なく之を用ゐたいものである。概言すれば、其問題を鑑み、又辯說の實際的の組立を考へて最も自然なる區分を採る可きである。けれども四個以上の項目に亘る事はなるたけ避けた方がよからう。兎に角其內で屢々起る處の數は三で其次は二である。

(ハ)區分の性質は當面の問題と區分の各部相互の關係を眼中に置いて定めなければならぬ。一項目によりて其問題を盡す事が出來ないと云ふ事は明である、然るに經驗の足らない說敎者は時々無意識的に之をなさんとして居る。主とする所は項目の數を減少すると云ふ事でない、諸項目が其問題の意を盡すや否やと云ふ事である。勿論此事は問題と云ふ言葉の意義によつて定まる者である。普通の問題が一個の說敎にて遺漏なく說き盡さるゝと云ふ事は稀有の事であるが、其問題につき少くとも一方面の論究は區分とせる諸項目によりて盡されなければならぬ。即ち其諸目は命題の意義、換言すれば論究せんとする問題を盡して居らなければならぬ。故に說敎に於て一問題を辯說的に區分し、又之を小分する事は、普通の論理的分解に於けるが如く綿密に亘る事は出來ぬ。論理的分解は命題の有りとあらゆる內容を嚴密に表さなければならぬが、辯說的分解に於ては命題の全般に通じ大體に亘る事を云ひ盡す樣な區分にて一個の組立を作るのであるから、必ずしも科學的正確を求むる者ではない。又小分に關しては、辯說上實際必要以上に分解をなす事も敢て困難ではない。チャールス二世がバローを評して『如何なる問題に就て談ずるも、彼は周到綿密殘す所なく、他人をして以後其問題に就きて何事をも云ひ能はざらしむるが故に不正なる說敎者である』と云ふた。バローの如きは一問題を論

ずるに當りてよく云ひ盡したるものゝ龜鑑とする事が出來るが、彼は時々分解的の議論に失するが故に間々聽衆に倦怠を催さしめた。一つの問題に就き餘り綿密な論理的分解を爲すことは時に說敎準備の一端としては有益であらうがもと〳〵辯說的の區分といふものは之と全く異なるもので、殊に小分に至りては大に趣を異にして居るのである。區分相互間の關係は明白で又釣合を保たなければならぬ。不慣れな說敎者は一項目に於て他の項目の領分に立入る樣な事も稀でない。時としては或問題の一部門を論ずるに當り、本來他の項目に屬する處の相類似せるものに論及する誘惑にかゝる事があるが、かゝる不釣合に陷らぬ樣注意しなければならぬ。時としては夫々の思想が何の部に適するものなるを定むるは困難であらうが、熟考の上之を一項の下に置くか、又は二項目に分つか、何れにしても、夫相應の場所に置かなければならぬ。のみならず、時には區分すべき程劃然異なつて居らぬ二個以上の思想を、全く異なりたる項目中に分置したり、又異なりたる二個以上の思想を何等の區劃もなく續け樣に縷々する事もある。

區分は明瞭にすべきのみならず、尙又釣合を保たねばならぬ。ホレースの警告せしが如く、有力なる說敎者にして、諸方より集め來りたる數多異種類の鳥羽を着たる身體に人頭と馬首とをつなぎ、之に魚尾を附したるが如き、何等の連絡なき事柄を並ぶる事があるから、たゞ不釣合たるべからずと云ふばかりでは足らぬ。大切なる事は諸々の區分が其問題に對し同種類の關係を持續せなければならぬと云ふ事である。經驗の少ない說敎者が最も普通に陷り易き缺點は、三項目中の一は他の二個と同一の地位を占むるものとしないで、其二項目を小分とした る他の命題と肩を比べしむる事である。是恰も區分中のあるものは

木の枝の如く、其他のものは小枝の如きものである。ある點から云ふならば、釣合は屢々極端に求められて居ると云つてもよい。勿論一項目の各小分は其項目に對して同一の關係を保たなければならぬ。然るに各項目は共に同數の小分をもたなければ釣合よき組立を作る事が出來ぬと思ふ人がある。如此事が自然に出來る時であつても人爲的に見え易きものである。殊に項目幷に小分の數が多き場合に於て如斯傾きは一層多い。人爲的なものゝ結果は面白くない。パスカルは如此事柄を、建物の釣合を保たんが爲に僞窓を設くるが如きものであつて、內部に釣合の缺乏せるを隱さんとする拙策で、其果して何物なるかを發見するや、嫌惡の情禁ずることが出來ぬと云ふて居る。尙釣合に關して人々が抱く他の誤解は各項或は各小分を論述するに當りて、大抵同一の長さにしなければならぬと思ふ事である。之が自然に發するならば美はしき事であるが、そんなことは少ない。其問題の內部的の關係、幷に辯說の特種の構案の釣合に比すれば外部的の釣合の如きは至つて下位に屬するものである。區分に關する原理は甚だ雜多にして、之を簡單に研究し又は了解せんとするは敢て利益ある事ではなからう。之を學ばんとする人は宜しく先輩の說敎集を意を用ゐて分解するならば區分に關する宗敎上の取扱に通ずることが出來やう。經驗の少ない說敎者は宜しく敎師又は他の相當なる友に請ふて己が組立の批評を得ば大に益する事があらう。此事に就ては概念的の命辭によりて敎へるよりも、其人が從來陷り來りたる欠點を指摘する事によりて學ばしむる方反つて益多きものである。此點又他の多の點に付ては、論理的の良書を研究せば大なる利益を得るであらう。

(二)區分の順序は單に論理的考察のみならず、尙また實際的のものに

よりて支配されなければならぬ。眼目とする處は、主に教訓と確信とを與へる時であつても、說教に於ては必ず一定の結果を得ん事を目的とするもので、普通感情を惹起し意志を動かす事は第一であつて、教示と確信とを與ふるは第二位に屬する事である。教示に關しては前後宜を得、先なる者が後なる者を了解させる助けとなるが如くに區分をなすべきは云ふまでもない。又通例消極的の考察を先にして積極的のものを後にする方が便利である。確信を與へる事に關しては、辯論の順序を定むべき一般的原則に從つて排列しなければならぬ。此原則は說教に於ても論文に於けると異なる所はない。又實際的の結果に關しては、當面の特種の目的を達することを勉め、想像力を燃し、感情を暖め、聽衆をして決心をなさしめ、又眞理に從つて行動せしむるには、如何に項目を選定し又之を排列すべきかを考へなければならぬ。此の目的を達する爲めには抽象的のものを具体的なるものよりも先にし、一般的なるものを特種のものより先にし、又通例教示と確信を與へる事は感情に訴へる事よりも先にすべきである。然れども感情に訴へる事は教示幷に議論の全部を終りたる後に一纏にしてもよいが、又主要なる思想を終るや否や、其度毎に直ちに之をなしてもよろしい。かく我等が話を進めるに從つて應用を施す事は時としては大なる利益を有して居る。即ち之が爲め感情の波動は連綿として一定の目的地に向つて走り、益々波濤を高むるであらう。加之思想は感情を引起すが如く、感情はまた思想に反映して、思想を活潑ならしむるものであるから、一項目に就て力ある應用を爲す時は、次の項目に對して更に深き注意を促すに至るのである。併し進むに從つて漸々興味を增さなければならない。然らざれば其結果はよくない。又我等は此の興味

が一歩々々增進しつゝあると云ふ事を確かに感じない塲合に於ては、應用を結尾に殘す方がよろしい。

一つの說敎を度々反覆する說敎者は宜しく更に排列を好良にする事が出來ぬか、又兎に角組立を改良する事が出來ぬかを考へなければならぬ。

(ホ)區分幷に小分の言葉遣は命題の夫れと同樣、正確、緻密にして可成暗示の力を有し、人の氣を引く樣なものでなければならぬ。

簡單にして奇拔なる言葉にて一區分を述べ劈頭第一に聽衆の注意を喚起する事が出來やう。可成くば、各項目を(小分に至るも)同形の表彰法によりて述ぶるがよろしい。併し之が爲め人爲的に過ぎてはならぬ。相類似せる言語を使用すれば之が爲め諸項目の釣合をよくするのみならず、わかり易く又耳さはりよきものである。獨逸の說敎者中にはまゝ項目を韻律に合せ、又は人々の熟知せる讃美歌の對句又はその數節などを此目的の爲めに用ゐたのもある。

(ヘ)區分の諸項目を前以て聽衆に告げた方がよからうか。これは或時代に於ては一般に行はれて居つたが、今でも之を規則として行ふ人も少なくない。獨逸の或る地方に於ては、說敎の骨組を印刷に附したるもの、或は豫め新聞雜誌に載せたものを、聽衆が敎會に入るに當り配布する事が一時行はれた。六ヶ敷問題に就て講演する時、即ち主眼とする所が、說き勸めると云ふ事ではなくして、敎示と確信とを與へると云ふ塲合には、區分や小分を明細に告げ、又辯說中度々他の部分との關係を示す事は極く適當である。併し正當の見解によれば、說敎に於て、此等の事は通例說き勸むる事の次に位するものである。最初に區分を告げてよい塲合は三つある。第一、六ヶ敷思想を述ぶるに當り、豫告

が此の思想を辿る助となる場合。時には之がかへつて解惡くすることがある。聽衆の方では反つて其時に及んで一個々々の項目を聞いた方が解り易い事がある。されど其他の場合に於ては先づ諸項目を列擧すれば相互に光を與へるものである。第二、單に實際的の印象が永久に記憶せらるゝのみならず、尙解釋又は議論の一歩々々の進行が永く人々の記憶に殘らん事を望む場合。第三、豫告をなす事によりて興味と注意とを失はず、却て是等を引起すと思はるゝ場合。之は其場合と其事柄によりて定めなければならぬ。もし以上の三條件の何れかゝ備はらずば豫告せぬ方がよい。豫告の方法は色々ある。先づ數字を以て表したる區分の項目を形式的に述る事より、全く形式を離れ、將に講究せんとする諸項目をあつさりと述ぶることに至るまで、其間の遣方は樣々ある。此等の範圍內に於て、其人の構想、見識並に趣味の力を活用するに從つて種々樣々の法を考へ出す事が出來やう。シチッドは一般に豫告するよりも寧ろ論述し來りたる要旨を再說する方が、思想を更に明かに、更に深くし、且つ容易く記憶せしむるが故に、優つて居ると論じてゐる。多くの場合に於て此事は眞なるに相違ない。併し多くの餘他の場合に於ては豫告の方はかへつてよい。時としては兩方を使用するもよからう。

最初に小分をも豫告する事はあまり望ましき事ではない。けれども或る特別な場合に於て思想の筋路が甚だ大切な場合には、之をなすも差閊はない。小分を輕々しく無造作に述ぶるよりも寧ろ一個の項目を述べ、然る後に其小分を告げた方が却て適當である。

(四) 辯說の一部分より次の部分に轉ずる經過點は目立たぬもの程よい。此事の最高理想とすべきものはシセロの比喩を借りて云はゞ

『巧に細工を施した切石にセメントを用ゐるの必要はない』。かく各部分は全く相適合し、各部は其前に隣れるものより自然に發展しなければならぬ。此理想を實現することは甚だ六ケ敷が、如何なる場合に於ても其問題を周到に研究し、又其思想をよく排列すれば從つて經過點は平滑になるのである。何等實際的の關係又は自然的の關係を有せざる諸項目の經過點を好良ならしめ、互に相連絡適合せしむる事は出來るものではない。されば若し經過に滯あらば排列宜しきを得たりや否やを顧みるがよい。澁滯の發生するは屢々連絡上不自然なる思想や、句節を挿入せんとするより起るのである。バフオンは云ふた『孤立せる思想を強ひて連絡せしめんとする人々、又今日一節を書き明日一句を綴ると云ふ風に斷片的に思想を纏むる人々は必ず無理な連絡を計るものである』と。讀書より得たる切拔を結合するに當りては此弊が一層加はるのである。此等のものを使用せんとする時にはその辯說に全く同化するものでなければならぬ。然らざれば如何に奇拔なるもの美はしきもの、良きものでも寧ろ使はない方がよい。眞によきものならばいつか用途があらう。異種類のものを徒らに累積結合せるものは辯說と云ふ事は出來ぬ。材料は何處の源より得るとも、諸材料は悉く調和し共に發展しなければならぬ。思想の活ける流は、恰も植物の養液、身體の血液の如く、辯說の全體に逆り之に活氣と伸縮の自在と勢力とを與へなければならぬ。

尙ほ時には說教の實際的組立や準備の急務からして、密接の連絡をもたぬ不適合、不自然なる思想を結合するの止を得ない場合もあらう。或は又二個の思想に關係を有する第三の思想を挿みて兩者間の連絡を滑にする事も必要であらう。如此媒介となる思想は自から嶄然頭

角を現したり、又は聽衆の注意を特別に引く樣なものではならぬ。多くの場合に於ては此の連絡を付けるには簡單なる數言にて足りるのである。此事を簡潔と雅致と變化とを以て處理する事は中々六ヶ敷き事であるが、相當なる注意と練習とによらば必ず相當の成功を見る事が出來やう。米國の最も著名なる說敎者の一人なるリチャード・フルラーは辯說の連絡點並に抑揚に長ずるは熟練せる雄辯の最高の證據であると云ふたと傳へられて居る。

連絡點は、直接なるものであつても、或は間接なるものであつても、音調や語勢を自然に變化する事によりて、今之より次の思想に移ると云ふ事を聽衆に知らしむべきである。時には區分或は小分を數字を以て表はし置き、其時に當り其數を擧げることもある。かゝる形式的の方法以外に、形式を離れたる樣々なる方法を用ゆべき場合もあらう。

數を擧げる事なく、何か左の樣な言語を用ゐて其次の點に進むことを示す事が出來やう。此等の語の極く普通のものを擧ぐれば「又」のみならず、時に、なほ又、更にもう一つの事は、次に、それから、是ばかりではない、之に反して、最後に」などである。しかし定まりたる句を使はなければ不適當であると思ふてはならぬ。よろしく前後の思想の關係を探り、適當にして簡單なる言葉を用ゐて其連絡點を表すがよい。但し新奇なるものを用ゐることと、變化を計ることゝを怠たつてはならぬ。

說敎が常よりも長き場合には何か簡短に靜なる態度にて其事實を告ぐるがよい。又いくらか斷りを云ふもよからう。若しも一定の個所が特別に六ヶ敷とか或は大切なるが故に格別の注意を促さんとする時には、其項目に入るに當り、其旨を告ぐるがよい、又稀には一言を加へて注意を喚起する事もよからう。如斯言葉を挾むことの適不適、又

之をなすの方法は常識と趣味とに訴へて定めなければならぬ。之は手際よくすることが出來なければ寧ろしない方が優て居る。辯說組立の事柄に關しては未だ一定不動の習慣の存するなく、大に自由なるは喜ばしき事である。說敎者、特に青年時代に於ては己が經驗は人々の經驗せし處よりも勝れて居ると思ふてはならぬ。寧ろ樣々異なりたる方法を研究し己が實力に最も適すると思ふ處のものを手本として練習し、又時々は外のものをも練習しなければならぬ。如斯にして或る一定の方法に固着する事なく、己が修養を益々廣く積み、聽衆の間に存する異なりたる趣味に順應すべきである。之に反して說敎者は當時の流行を追ふ必要はない。寧ろ講壇辯說の性質幷に構案を考へ、己が個性を自由に働かしめ、自己に對し又聽衆に對し、如何なる影響を與へるかを鑑み、自ら發見する處の方法を取る事もよからう。獨立獨創の如く見ゆるを恐れてはならぬ。又高尙なる趣味と敬虔の念とを失はざる範圍に於て實驗を行ふを憚るにも及ばぬ。

第三節　結尾

說敎の冒頭の準備を怠たる說敎者は殆んどないが、結尾を怠たるものは隨分多い。然るに後者は前者よりも更に一層大切なるものである。近世政談演說家として第一位を占むるジョン・ブライトは辯說の他の部分に對しては如何に準備がなくとも結尾の準備には大に苦心したと云ふて居る。ブローハム公がカロライン女皇辯護の爲め上院に於て爲せる彼の有名なる演說の結尾は少なくとも二十回書き直したと云はれた。ワーレン・ヘースティングの審判に於てバルクが爲せる第一回辯說の結論は十六回稿を更へたと云ふ事である。希臘幷に羅馬の雄辯家等は其結論に多大の勞を執つたが、これ彼等は戰を決する

最後の戰鬪なる事を感じ之に對して全力を注がねばならぬと感じたからであらう。然るに草稿なくして話す處の說敎者の內には此事を怠る人々の殊に多きを屢々發見するのである。此人々の說敎は其初に於て、又說敎の前半の進行に於ては眞によき準備の形跡歷々としてまことに美はしくあるが、結論に近づくに當り、彼等は己が進むべき道を失ひ、當惑の態にて彷徨し、其爲す處を辨へざるが如く見えるのである。又他の說敎者は結論に及び感情に走り一般的奬勵に陷り身心共に疲勞し散漫と無力と平凡とを以て終るのである。結尾は川の如く、流るゝに從ひ其水量と水力とを愈增すべきであるのに、之に反して其辯說は大なる沼澤に入りて其形を失ふが如く、又は水入より水を注ぎ盡すが如く哀にも流滴點々として終るのである。

されば規則として結論は周到に準備せざる可らずと云ふ條項を設けたいものである。個人的に聽衆の感情に訴へんとする時には自分並に聽衆が其當時有する所の感情の狀態に從ひ、多少斟酌して之を述べなければならない事もあるだらう。結論の述べ方は其時の感情に左右されなければなるまいが、準備の時に大抵此說敎は如何なる思想を以て結ぶ可きかと極める事が出來る。結論を述ぶるに當り不圖心に浮ぶ處の思想あらば此思想を利用して、前以て準備して置いたものとは全く異なりたる方向を取るも、又は更に高き平面に位する結論をす爲も差閊はないが、先づ必ず何か適當で効力ある結尾を準備して置かなければならぬ。問題が當然感情的の奬勵に走るが如き場合に當り、もし此の問題の軌道を逸せざる結論をなさんと欲せば、前以て奬勵の範圍を眼中に置くがよい。又此の感情的奬勵の到達點、即ち最後の訴をなして終る個所を豫め定めて置くがよい。我等は一方に於ては

周到綿密なる準備をなし、又他方に於ては之と共に臨機應變の處置を執り得べき自在なる演述法によらんとせば如何にして之を爲し得べきかを學ぶはきはめて困難にして又大切なる事である。

說教の結尾の一要素は要點を總括再擧する事である。若し辯說が主に念を入れた說明、又は骨を折つた議論より成立するか、又は其數項目が大切で記憶に價するものであるか、之を記憶するは困難であると思ふならば、區分並に、時には、小分をも明瞭に反覆するがよろしい。然し尙シセロが云へる如く『追懷を新にするので演說を再びするのではない』と云ふ樣に處理しなければならぬ。餘り念を入れたる再說は不必要なるのみならず、反て倦怠を催すものである。其時に當り或る得意の點を更に延長附加したいと思ふ念が如何に盛んであつても再說の範圍を脫してはならぬ。大抵の說教に於ては數個の思想を再說し、之を一つ一つ聽衆の心に打込むことは望ましくない。寧ろ此等の點を一まとめとし確信を與へ又は說得の實を擧げんが爲めに全力を集中して最後の一擊を下せば足る。如斯き場合に於ては形式的に要點を摘まむ事は必要ではない。反て形式を離れ思想の過程又は其要點を、(時には異なりたる言葉を用ゐて)、擧ぐる方がよい。此方は辯說の本旨に適ひ、通例再說よりも却てよろしい。再說を以て結尾全體となすことがあるが、大抵の場合に於て再說は結尾に入る門戸に過ぎない。殊に多數の項目より成る辯說の場合に於ては、結尾に達する前に通例最後の再說をなす方がよい。

結尾は概して應用より成立つものである。此の應用と云ふ言葉は、既に論じたるが如く、通例色々の種類の材料を包括するものとして用ゐられ、其內には、實踐的行爲に對する暗示、及び說勸の爲の訴などのこ

とを含んで居る。

應用は結尾の所に於てすると限つたものではない。時としては之が實に説教の大部分を占むることもあり、或る點を敷衍して應用となすこともあり、又は全體に亘りて應用を配置することもある。此の問題に關しては説教の材料を論ずる章に詳しく説いた。(第一編第八章)。勿論結尾こそ應用を集中すべき所である。辯説の他の部分に於て之を爲すよりも結尾に於て應用を爲す時は強き信仰と、暖かなる宗教上の敬虔と、深き熱心とを以て爲すべきである。

或る説教者等はどの説教でも必ず激烈なる感情に走りたる訴を以て終らなければならぬと思ふて居るが之は間違である。反て靜かに結んだ方がよく、寧ろ此の方が深き感動を與へる事も稀ではない。眞に自ら之を感ずるに非ざれば如何に其問題が感情的ならん事を要求して居るとも、感情に充ちたる風を裝ふて話してはならぬ。故意に己が感情を高めんと務むるも失敗に終るが常である。よしや自分では成功しても、之が聽衆に與へる所の印象は決してよきものではない。感情に滿ちたる結尾を準備して置きたるにも拘らず、愈々實際の説教に於て説教者の感情も、亦聽衆の感情も漸々冷却し到底之を刺激する望の絶たる時は、準備したる結尾を削るか又は其調子を柔げた方がよい。激烈なる言葉であつて聽衆にも又説教者にも何等の感動をも與へざるものが、反ぼす所の反動程悲しむべくして又有害なるものは少なからう。「訴への形骸を説いてはならぬ」(フェルプス)。決して忘れてはならぬ事は單に感情を引立て、恰も之が眼目であるが如く、之のみを目的としてはならぬ、寧ろ意志を動かし相應なる行爲を爲さしめんが爲めに感情を引起さしむべきである。神に對する愛と云ふことであ

つても單に感情のみでは足らぬ。

結尾に於ける奬勵は、通例其論じ來りたる問題に連絡して居る特種のものでなければならぬ。流暢懸河の辯を有する說敎者の一大弊害は殆んど如何なる問題にも如何なる機會にも同樣に當嵌る樣な一般的の訴を以て終ると云ふ事である。之は時には已むを得ぬかもしれぬが大抵更に特種の奬勵の方が尙有効である。

一時バプテスト、メソヂスト其他の敎會に於ては說敎の後に外の牧師又は牧師以外の信徒が立つて奬勵すると云ふ事が極く普通であつた。此の習慣は特別說敎會に於ける外、今は一般に廢つたが、適當に之を爲すに於ては眞に有益なるものである。不意にして且適切なる奬勵によりて聽衆中の眠れる者を覺醒するは極くよい事であらう。併し如斯奬勵は說敎の主意より離れたり、又は漠然たる概括に陷つたりしてはならぬ。之を爲す時は通例其問題を、或は其問題の或る方面を更に同方向に進めるものでなければならぬ。此の種類の思想が心に浮ばぬ時には說敎の內に含まれては居ないが尙ほ其大體の結果に於て說敎と調和する樣な思想を捕へ、聽衆を導きて同一の方向に向はしめなければならぬ。かゝる奬勵をなす人は先づ自ら云はんとする念を抱くのみならず、尙又何物か云はんと欲する一定のものを心中已にもたなければならぬ。さもなくば聽衆をして倦怠を催さしむるものである。

嚴しく人を誡むるが如き說敎であるならば神の約束に基きなぐさめと奬勵の言葉を話す事も時にはよからう、又辯說が熱心に人を招くことを主とするものであらば、終りに臨んで、キリストの弟子となり遭遇すべき困難に付て明に話し、急速に信仰を云ひ表す事を制するもよ

からう。如此結合は全體に於ける感動を却て强めるものであるか、又は之が却て聽衆の心中に兩者を仲和するに至り、兩者より何等の影響を受けざるに至るや否やは其場合に從つて定めなければならぬ。警醒をなし、或は福音の眞理を以て人を驚かし又恐れしむるが如き事を云ふ時には人を責むるを快とするが如く語らず、寧ろ特に柔和を以て之を爲し、愛の赤心より話すのであると云ふ事を知らしむべきである。

結尾の長さは、冒頭の長さと等しく其場合の事情によるものであつて、一定の規則に當嵌めるわけには行かぬ。大弊害とも云ふべきは長過ぎる事で、殊に奬勵的の訴へに於て之を見るのである。辯士はいつまでも、繼續せんとする念慮を懷くものであるが、聽衆は長く其感情を繼續する事が出來るものでない。說敎が長かつたならば、或る特別な場合の外、結尾を簡單になすべきである。時としては最後の項目は結論に至る思想に導くものであるから、之が實際的結論の代用をなすのである。如斯場合に於ては別に結尾を添へる必要はない。又通例之をなさぬ方がよい。時としては趣味と、飾りなき嚴格とを以て不意に結ぶは、之を巧者になさば甚だ有効である。時として說敎者は感情に溢るゝことがあらう、斯る時には無言にして涙に充つるは、言葉よりもかへつて力あるものである。「結尾の長きに失するは構案を用ゐずして說敎をなし或は著作をなす所の人々の通弊である。實に說敎の準備並に演述につき確定したる成案を有せざる人は皆、此弊に陷つて居る。新思想が此人々に浮ぶや直ちに之を先に述べたる事柄に結び付けるのである。甚だしきに至つては說敎者は彼が辯說の目的を達する能はず、又彼が起さんとせし程の興味を引起す事も出來ぬと云ふ事を認むるや、此の失敗を如何にかして贖はんとして徒らに其處彼處に

彷徨し、遂に結尾に入るに當り目的とせし處のものより益々遠ざかりて終るの止を得ざるに至るのである(キダー)。就中之より結尾に移らん事を告げてから後、再び後返りして迷ひ狂ふは愚なる事である。

辯説の詳細なる草案を(書くと書かざるとにかゝはらず)作る前に、結尾の大略を定めなければならぬ。かく詳細なる諸點の發展を結尾に於て利用せんとする考へを眼中に置きて始めなければならぬ。若し又他の材料が與へられてそれを排列しても、尙ほ此の思想に對する結尾を思ひ起さぬ時には、此の事に最も適當なる結尾は如何なるものであるかを尋ね、點綴したる全體の思想を更に調査しなければならぬ。或は題詞、或は其連絡、或は相似たる聖句などを再び檢査する時に當り、何か適當なるものを見出す事が出來やう。どうか、かうか結尾を發見すると云ふ事ではなくして、如何なる結尾が最も適當にして最も有効であるかと云ふことが一番大切である。辯説を作り終つてからでなければ結尾を詳細に作る事は出來ぬ。實に本論を作つて居るうちに、最初に考へた結尾よりも更によきものを思出すかも知れぬが、其時には結尾を變更した方がよろしい。或は之と同一のことが演述中に起るかも知れぬ。本論と結尾とが共に相順應すると云ふ事が大切である。之をするには本論の組立を作るに當り豫め結尾の大體の內容幷に設計を定めなければならぬ。且つ本論を作るに當り、或は演述の進むに當りて、考へ出すがまゝに、其體裁、音調、或は其性質をも變更するがよい。

結尾の最後の言葉は、既に論じ來りたる問題の要旨を摘み、感動を與へる樣に再説するが如きものであつてもよい。「吾等が最後に訴へる時に當り、其辯説全體の主要なる思想を力强く且つ活潑に再現するが

如きものを用ふるは甚有効なるものである。之が爲めに多くの確乎たる證明を費し雄辯術に適ふたる幾多の衝動を與へたる後、要點となるべき眞理、根源的思想を其絶頂に進めたる瞬間に於て、佳麗と簡潔とを得んがために全力を注ぎ、勢力を一點に統一するは聽衆に對して極めて効力あるものである」(ポッター)。題詞を最後の言葉とするともよろしい。辯說が題詞より發展したるものであつて之が意義を遺憾なく盡したる場合に於ては、終りに臨んで力を入れて題詞を再び述べる事は是迄說き來りたる所のものを括りて、感動を與へるものである。又は我等は聖書の他の句節、又は讃美歌の一部分、又は神の祝福を祈る事を以て終るもよい。此の最後のものは時として自然にして感動を與へるものであるけれども、それが規則となつてはならぬ。併し多くの場合に於ては或る特別なる思想を以て終るのが、結尾の內容から云つても、又其組立から云つても當然であらう。兎に角最後の一句(センテンス)は適當なるものであつて、且つ感動を與ふるものでなければならぬ。されど其の體裁は細密に過ぎ曖昧であつてはならぬ。結尾は極大切な時であるから己が名譽を考へる事なく、單に己が責任のある處と聽衆の救とのみを心とせよ。

第三章

說教の種類

一、題目的說教
二、題詞的說教
三、解釋的說教

種々手を盡して說教を分解せんとした人もあつたが何れも不成功に終つた。正確に又科學的に分類する事は其性質上不可能である。如何なる分類によるとも種々の點に於て交錯するを免かれぬ。若し說教を分ちて教理的なものと實際的なものとすれば、教理的なるものでも實際的の應用をもたなければならないし、又實際的なるものでも其基礎を教理的なるものに置かなければなるまい。若し又之を分ちて說明的、例證的、議論的、奬勵的のものとするならば、是等のものの全体、

若しくば二個、或は三個の要素が結合し、其内の何れが重なるものであるかと云ふ事が出來まい。如斯從來人々の考へ出した分類法は何れも不完全なものである。然るに斯る不完全なる分類の内にも、二個の明瞭なる原理、若しくば基礎が存して居る。即ち其一つは說教の題に關係するもので、其の題目、其場合、及び其材料に拘はるものである。是等の事に就ては既に論究した通りである、(第一編三章—五章)。分類の他の基は說教學上の組立に關係して居るものである。此事はフェルプスが指摘せしが如く、他の作文と異なり、說教に特有のもので、聖書に關係を有する事より生ずるのである。故に排列のことに鑑み、說教學上の組立を見て說教の種類を定むるのは適當な事であらう。既に擧げたるが如く、此等のものは題目的說教、題詞的說教、幷に解釋的說教である。之より各種の特徴を擧げ是等を取扱ふことに關して實際的の

注意を與へやう。題目的說敎と題詞的說敎との差は、辯說の骨組殊に區分の出發點に存するのである。此の差異は極めて實際的にして、又大切なるものである。題目的說敎は其區分をなすに當り題詞を離れて問題より之を得るのであるが、題詞的說敎は題詞を基として區分を作るのである。後者の場合に於ては前者と等しく一定の問題を明瞭に掲げることもあるが、此の問題を問題の性質に關係して區分するのではなくて、單に題詞によりて與へらるゝが如き區分のみを爲すのである。時としては以上の二つの方法は一致する事があらう。即ち問題に基きて始まり、遂に適當なる題詞を發見して、問題の論理的區分が悉く題詞の內に含まれて居る事もあらう。又題詞を設け之に基きて其問題を擧ぐるに當り、題詞中に與へらるゝ區分が、其命題の完全なる論理的區分と符節を合する事もあらう。然しながら斯く一致する事は稀である。

第一節　題目的說敎

題目的說敎に就ては、題詞より問題を取り、之を通例一個の命題として叙述するのである。題詞は思想を供するのみにして、說敎の組立に關しては別に干涉する事なく、問題の性質に從ひ、恰も題詞より生ずるものではなきが如く區分を施し、又論究を與へるのである。

此の種の論究法は數多の利益を持て居る。辯說の効果に離る可らざる關係を有する、統一を計るに適して居る。是れは說敎者の心意を練磨し、比類なき論理的分解の力を增さしむるのである。如斯き論究法は一層論理的性質を備へ又一層完備せるものなるが故に、聽衆中の或る種の人々、殊に敎育ある人々を喜ばしめ、彼等を說得する力を有つて居る。其上此の方法は一問題を精しく論ずるに適して居る。聽衆

の要する處のものは、或る一個又は他の題詞が表はす處の特別なる方面の事のみならず、寧ろ或る教理、一般又は特種道德に關する或る題目などに付て充分に述べる事である時もあらう。自然界の事物は科學的に分類されて並列せざるが如く、聖書は論理的命題の順序をなして眞理を表してゐない。是れ聖書が多くの人々に讀まれてゐる所以にして、又題詞的說教に豐富なる變化を與ふる所以である。然ながら又時々は或集合的の問題を論ずる事も教訓的にして滿足を與ふる事がある。

問題は通常一般的なるよりも寧ろ特種的のものゝ方がよろしい。此の事は既に論じたるが如く(第一編第三章第一節)毎週述ぶる所の說教に變化を生せしむるのみならず、說教の問題の種類を一層豐富ならしむるのである。就中それが論理的性質上特種の主題なると共に、今選びたる題詞の特種の主題であるならば、題目的說教に對する非難の一つ、即ち題詞が說教に於て重要なる職分を盡さぬと云ふ弊を免るゝのである。屢々題詞は單に出發點となるに過ぎずして、形式的の連絡を失ふのみならず、何等の活きた關係をも失ふに至るのである。甚しきに至つては、單に一個の格言たるに過ぎぬことがある。是れ果して當を得たるものなるや否やは疑ふ可きである。勿論或る問題の特種の一方面を表す題詞を取りて、一般に亘る問題を論ずる爲めに用ふる事、或は濶大なる題詞より一般的なる問題を取り、然る後に專ら其の一區分に力を注ぐ事は不可なからう。然し通例問題は正確に題詞より當然湧き出づる處のものであつて、最もよく其意義を盡すもの方がよろしい。如斯特種の問題を取りたる適例はロバート・ホールの三個の說教の內に表はれて居る。即ち「未來審判論(其理由)」「未來の審判の

性質」「若き時に未來の審判を記憶すべき事」などであつて、各題詞は特種の題目を表す樣なものを採つて居る。第一は使徒行傳二十四章二十五節の「パウロは公義と撙節と來らんとする審判とを論せしかば」を取り、第二は希伯來書六章二節の「かぎりなき審判」第三は傳道書十一章九節「少者よ汝の少者き時に……其諸の業の爲めに神汝を鞫き給はんと知るべし」を取つて居る。ホールの傳記を物せし人は氏が或る問題の一方面を限りて論ずる事を好んで居つたと云ふて居る。之と等しくサウスも誘惑より逃るゝ事に關して數個の說教をなして居る。

問題は其性質に從ひ、又之を論ずる實際的の目的に應じて區分すべきものである。此目的により其問題の說明、證明、應用の何れかを主とし、或は多くの場合に於ても、以上のものを結合せなければならぬ。區分の方法は實際極めて多種多樣であるから、說教者の分解的、想像的の能力に應じて、自由行動を取るべきである。シセロはアリストートルの題目論を抄略し、辯論の區分に關して、二三の實際的注意を與へたる後、次の如く云ふて居る「辯說には、少しの用をもなさざる區分の方法もある。是れ即ち哲學上使用せらるゝものであるから、余は此等のものを取り去つた」と。論理的分解と辯說的區分との此の區別は確然と守る事は出來ぬ。問題の區分に關しては、實例を見ざれば學ぶ事は出來ぬ。故に說教集を批評的に分解する事によりて、或は自ら組立てた骨組を再三反覆吟味する事によりて、之を學ぶのは最も有益な事である。

第二節　題詞的說教

題詞的說教にも題目的說教と同一の一般原則を當嵌める事が出來る。即ち通例構案にも區分を施すべき必要あるが故に、前章に論じたる區分に關する原理は、題詞的說教並に其他の種類のものにも一般に

適用される。題詞的說教を分ちて、一個の問題を論ずるものと、數個の問題を論ずるものとの二とすることが出來る。

(一)一個の問題を論ずるものとは、其問題を題詞より取り之を叙述し、然る後其題詞が示すところの區分を作りて論ずるのである。既に述べたるが如く、此の區分は其問題の完全なる論理的區分と一致する事もあらう。然し如斯極く稀有な場合に於ても、若し區分が題詞の考察によりて實際生ずるものであるならば、やはり題詞的說教と稱んでも差閊ない。普通の場合に於ては、如斯して題詞より得たる骨組は、其問題の論理的分解より生ずるものとは全く異つて居る。或る著者等は此の種類の題詞的說教を題目的說教と混合して居るが、之は兩者とも一定の問題を設くるからである。又他の人々は此種類のものを題詞的、題目的說教と呼んでをる。

如斯題詞によりて區分せんとする時は、論ずる處の問題を遺漏なく分解し盡さざるまでも、是等の區分は其問題に對して又相互に連絡を保ち、一個の脈絡全體を貫く組立を有し、全體が釣合よく構成されて居なければならぬ。然らざれば辯論は不完全にして破片的であると云ふ感を人に與ふるに至るものである。

うまく組立てられた此種類の題詞的說教は題目的說教の長所の多くを有するばかりでなく、論せんとする問題並に重なる思想を題詞より取るが故に、題詞と更に密接なる接觸を保つと云ふ大なる利益をも持つて居る。故に此の組立法は廣く採用されて居る。此の法によらば優に變化と清新と創意とを得ることが出來る。「隱れたる骨格を發見するには說教者に才能なかるべからず。何人にてもあらゆる說教學的方面に亘り意を有ゐて己を養なはゞ漸次確實に此の才能を獲得

するに至らん。此事は、他の凡の事に上達すると等しく、修養訓練の間に不知不識達するものなるが故に之を獲得するが爲め、今茲に一個の特別なる規則を設くるは到底不可能の事なりとす。然れども之も獲得せざるべからざるなり。然らざれば題詞的說教を作るの根本的才能を缺くに至らん。且つ此の才能は正當なる發達を遂げたるものならざるべからず。一題詞中に實際含蓄するよりも更に多種の意義を發見するやも量り知るべからず……聖書の意義を發見するに必要なる此の才能を使用すべき範圍は意義の精髓――其の明瞭にして餘す處なき實質にのみ制限すべきなり」(シュエッド)。數年の間同一句節に付き度々說教をしなければならぬ事情の許にある獨逸の說教者等の內には、同一題詞に基き新しき組立を考へ出すに妙を得て居る者がある。「例へばペテロが主を拒みし事蹟に就て語ると假定せよ。或は拒絕の事實即ち其原因、其結果、又之に類するものより說き起す事が出來やう。或は此の世に於て一度キリストの弟子たるものが墮落の方向を取らんとするや、萬事皆之に助勢するものであると云ふ思想より說き起す事も出來やう。或は又ペテロの悔改、即ち愛幷に愛の弱點を豫想する所の悔改より說き起す事も出來やう。或はキリストがペテロに對して表し給へる愛の力、(イ)如何に此の愛が法律や刑罰よりも優りて彼をして謙遜ならしめしか、(ロ)如何に此の愛が彼を新なる人となしたりしかと云ふ事から說き起す事も出來る。以上擧げ來りたる五個の說教は、何れも同一の題詞の全體に亘るものであるが、五つとも異りたる光を放つて居る」(パルマー)。主が病人を醫し給ひし奇蹟中の一を取りて、其事蹟の內に表はれて居る神の惠みと云ふ點より考て、その基督のな

し給ひし事によりて神のなし給ふ事を說明する事が出來やう(例へば主は其助を躊躇し給ふが遂に助を與へ給ふが如き)、或は又此事蹟を主として倫理的立脚地より考察する事も出來やう。此場合に於ては基督は我等の手本となり、それと相似たる場合に臨んで、我等も彼に習ふべきものと說く。或は又我等は癒を受けた人々の行爲を考て之を信仰の標本として人々の前に示す事も出來やう。(例へばカペナウンの百人長の如き)。英國の說敎者中メルヴヰルは大抵の人々には何等の意義をも與へない樣な句節を取り、之より豐富なる意義を發展するに妙を得て居ると云ふ評判を受けた。

題詞的說敎の弱點とも云ふべきものは、其問題に關して意見を述ぶるか又は勸話をするかに過ぎずして、殆んど其問題の組立てとか區分とか云ふべきものを見ぬことである。ペドームは次の例を擧げて居る。使徒行傳九章四節「ソウロ〳〵何故我を窘迫むるや」を取り之を(一)迫害の精神を抱くは未信者の習性(ならひ)である。(二)基督は迫害者にも眼を注ぎ給ふた。(三)基督者を迫害するは基督を迫害するのであるとキリストは考へた。(四)基督の招きは或る特別の事を爲さしめんが爲めであると云ふ項目に分けて居るが、第四のものは省略してもよろしい。題詞に基きて以上の如き事を云ふは項目を並べて云ふよりも更に有益であるかも知れないが、かく粗雜に說敎を組立てんとするはあまり賞むべき事ではない。問題を題詞的に區分する方がよいか、或は題詞より離れて、其問題の性質に基きて論じた方がよいかと云ふ事は、其說敎を作る時に當りて各自の判斷に任せなければならない。

(二)第二の種類に屬する題詞的說敎とは、一個の定まりたる包括的の問題を有せず、ただ題詞によりて與へらるゝ數個の題目を順序を追ふ

て論ずるものである。此の數個の題目は固より一纒めにする事は出來なくも、辯論に統一を與へるやうな相互の關係を有するものでなければならぬ。聖書の同一の語句であつても全く異りたる數個の項目を立て、是等に付て一個の說敎を作るは、畢竟連續したる數個の說敎と云ふべきものである。統一のない說敎は沒趣味にして無力なもので、實際說話と云ふ事は出來ないものである。この統一は問題に關するものでなければ、人に關するものでも、場所に關するものでもよいが、人や場所に關する場合に於ては何か內部的の連絡があつて全體が其說話の一般的に適ふものでなければならぬ。此法によりて自殺、忘恩、惡意、後悔などは皆ユダに就て、の說敎の內に論ずる事が出來やう。何故と云ふに是等のものは一人に關係するばかりでなく、ユダの場合に於ては、それが密接に關係して居つたと云ふ事は其順序を變へて惡意、忘恩、後悔、自殺と云ふ風に論ずる事も出來ると云ふ事によりても明らかである。是等のものがユダに於て互に相連絡して居るものであると云ふ事を指摘したる後、辯說上の便宜に從ひ、他の順序を採つて論じてもよろしい。かうせば其諸項目は別れて居つても一種の統一を持つて居る。かゝる例によりて見れば此の方面に於て隨分勝手に論ずる事が出來ると云ふ事を示して居るが、通例は辯說の諸項目の問題と、なるべく內部的關係を深からしめなければならない。題詞的說敎の此の部類の大缺點は、尙ほ亂雜にして不規律なる一隊の亂發の如くであつて、訓練を受けたる軍隊の規則正しき集注的發射の如きものでないと云ふ事である。此の缺點を避けんとせば說敎に連絡を有する一種類の思想以外のものは如何に興味あるものであつても、如何に敎訓的なるものであつても、之を取除かなければならぬ。

此の二種の題詞的說敎に於て(殊に第二のものに於て)題詞の言葉其儘を取りて區分とする事もある。即ちユダ書二十四節を取り(一)爾曹を躓かせじと保り(二)爾曹をして(イ)汚なく(ロ)歡びて(ハ)其榮光の前に)立つ事を得せしむと別ちて神の信者を守り給ふ事を論ずる事も出來やう。或は加拉太書五章六節に基づき、基督にありて益あるものは何んぞやと云ふ題を設け(一)割禮を受けざるも益なく(二)惟(イ)愛によりて(ロ)行く所の(ハ)信仰のみ益ありと論ずる事も出來やう。勿論字句の順序は辯說に適する樣に變化してもよろしい。路加二十三章四十三節(一)樂園にあるべし、(二)我と偕に樂園にあるべし、(三)今日なんぢらは我と偕に樂園にあるべし。以上の如く題詞の語句を其順序に從つて取り、是等を引き延ばす事は人をして倦怠を生せしむるに至る事がある。シユライエルマッヘルは之を指して題詞を綴出すことと呼んで居るが、其語句の生命を失ふに至るまで之を粉碎し、人をして嫌惡せしむるに至ることがある。然しながら題詞の選擇よろしきを得、其論究が自然にしてしかも淸新、敎訓的にしてしかも活氣を有し、諸項目に亘り明瞭なる連絡を保ち、終りに至るまで辯說的進行を維持するならば、如斯說敎は甚だ有効なるものである。題詞的說敎を興味あり又感動を與ふるが如くなさば人々は進んで其心を暫くも題詞より離れざらしむるに至るものである。

題詞の順序に從ひ異りたる言葉を用ゐて區分をなしてもよろしい。或は辯說の都合によつては異りたる言葉を用ゐ、異りたる順序を取つてもよい。されば一定の問題に關し題詞的の說敎を爲す時には其叙述法は普通色々違つて居つて、其良否は題詞を區分し又之を說明する巧拙によるものである。以西結書十一章十九、二十節「我かれらに唯一

の心を與て云々」を取り眞正の宗教と題し左の四項目に展開する事が出來る。(一)眞正なる宗教の本源(二)眞正なる宗教が造る處の性行(三)此の宗教は服從を要求す(四)此の宗教は幸福を全うす。詩篇の七十三篇二十四、二十六節を取り神は敬虔なる人の唯一の望なりと題し(一)彼は生涯の導き者(二)彼れは後に我を受くるもの(三)彼は我がとこしへの嗣業とする事も出來やう。時には題詞の言葉遣ひより少し離れたるものを用ゐることが必要であらう。かく羅馬書五章一、二節を取り信者の幸福なる狀態と題し(一)彼は神と和ぐ事を得(二)彼は神の惠みに入る事を得(三)彼は神の榮を望みて欣喜を爲すを得んと。

問題を掲げ是等の諸問題に答案を與ふるが如く仕組て說教の區分を作り其題詞の思想を充分に又手際よく表はす事が出來ることも時々ある。是等の例は人のよく知る所である。

題詞的說教を評論するに當りては題詞の示す處の見解に必ずしも嚴格に從ふに及ばない。其內の一項目を相應に又說教の組立に應じて發展し又應用してよろしい。しかし人工的なる事を離れ、題詞の範圍內に於て諸方面の發展をなすを見るはよろこばしきものである。

第三節　解釋的說教

解釋的說教と云ふ名は其材料の特徵として主に解釋を事とすると云ふ事實より起つたのである。されど此種の說教は、其組立、其辯說的の排列、並に順序などの事に關する說教學上の特徵に於て、註釋書又は解釋的の論文と異つて居る。されば今茲に此の大切なる種類の說教に付て論究するは敢て失當ではなからう。說教者に向つて君は解釋的說教を時々試みらるゝかと問はゞ、殆んど十人は十人まで「否、余は久しき以前より其種類の說教の必要を感じて居る。併し其方面に余が

今日まで費した苦心は全く不成功に終つた。余は此事に就て才能をもたぬと思ふ。斯う彼等は云ふだらう。勿論如斯き才能を發達せんが爲めに全力を盡した人はあまり無い。題目的說敎に長せんと欲して之が爲めには數多の歲月を費すも惜まず、又之が爲めあらゆる修辭學上の修養と其練習とを傾注するではないか。然るに解釋的說敎を爲さんとせば是と全く異りたる練習と、又恐らくは異りたる方法によりて聖書を研究しなければならないものである。然るに此人々は此等の手段を踏まず、唯一回之を試みて早や比較的失敗に終るのであるが、是で成功しようとするのは無理だ。これ恰も常に朗讀的說敎に慣れた人が說敎を書く事をやめて、不充分なる準備を以て戰々兢々として講壇に立て當然失敗したるを楯とし、我は草稿なしに說敎する才能を持たぬと速斷するが如きものである。

(二)解釋的說敎の利害を長く論ずるは不必要の事である。其利益は明に普く認められて居る。アレキサンダー氏は「說敎所感」の中に巧に此の事を論じて居る。彼の言葉によれば

(イ)解釋的方法は說敎の觀念幷に結構によく適して居る。(ロ)之は初代幷に古の人々の採りし方法である。(ハ)之は說敎者の側にも又聽衆の側にも聖書の知識を更に確實にする。(ニ)此の方法は說敎中に純粹なる聖書の眞理を充分に含蓄せしむることが出來るのみならず事物に就て聖書的見解を與ふることが出來る。(ホ)之は說敎中に聖書の多くの句節に就て說く機會を與へる。(他の方法によりてかゝる機會を得る事は少ない。題目的說敎として論せば聽衆中の或る人の氣に觸るゝ樣なことであつても、解釋的方法によらば其句節より自然的に湧出する大切にして然も實際的の注意や訓戒を施す事が出來る。(ヘ)又之

は都合よき說明を加へたり、又は題詞を曲解したりして人爲的の取扱ひを爲すに至る誘惑を大に減少するのである。人々が屢々如斯曲解を施す譯は簡單なる聖句より正當に入用だけの材料を取ることが六ケ敷いからである。

此方法に對する反對說を擧げんに。解釋的說敎にして時に拙劣なるものがある。之が爲め解釋的說敎は勞力を除く所以に過ぎぬと云ふ考が一般に行はれて居る。例へば雨の降る日曜日や其他の時など、說敎者が說敎の準備を有たぬが爲め、又は念を入れて準備したる說敎があつても之を惜み他日更に多敎の聽衆のある時に用ゐんと考へ、其代用として聖書の數節を朗讀し之に付きて二三の勸を爲す事が屢々ある。或る老年說敎者が云へる如く此種の說敎者は「一節に困難を感ずる時には次の節に逃る事が出來る」が故に、之は最も安全なことであると考へて居る。斯の如き有樣であるから說敎者が長き題詞を取り之に就て話をする時にはこれ勞力を節くに便宜なるが爲めであると人々が推論するは當然のことである。正直にして勞力を惜まない說敎者は此反對說を破ることが出來る。併し玆に他の重大なる不利益な點がある。即ち悲いかな我が有する聽衆はスコットランドに行はるゝ美風の如く說敎中聖書を手にすると云ふことに慣れて居らない。從つて短かき題詞のみを常に聞き慣れて居るから長き題詞の連絡や一般の意義などを記憶することは甚だ困難として居る。說敎者は出來るだけ此の困難を取り去らなければならない。又或る人は今日の如く極めて忙はしき時代に於て何時も〳〵解釋をのみ事とするは單調に失して居ると云つて反對をする人々もある。成程日曜毎に同一書又は同一の章の解釋を聞く時には之に倦んで來やう。

又聖書に少しも興味を有たない人々もある。この人々は說敎者が一題詞を採り之を出發點として何か新らしきものを與へんことを願つて居る。又解釋的說敎は之を聞く者をして深く喜びを感ぜしむるが如き連續せる論說を述べることが出來ないと云ふて反對する人々もあるが、聖書の理論を探り出して之を發展せば說敎者が自分で組立てるものよりも更に興味あるものとすることが出來まいか。又題詞の說明にのみ重きを置く辯說は應用に餘地を與へないと云ふて反對をする人があらば、我々は之に答へて云はん、應用の切實なると否とは題に就て聽衆が既に興味を喚起して居るや否やに由つて定まるものである。故に之より應用に入ると云ふ豫告を與へ先づ人々をして防禦的の態度を取らしめ、然る後之をなすよりも寧ろ簡單に、機に觸れて應用するか又は訴を爲す方が却つて有力である。シュエッド氏は「日曜學校幷に聖書研究會の創立以來解釋的說敎の必要は稍々減退した」と主張して居るが、更に語を續けて「說敎者たるものは時々精巧なる解釋的說敎に全力を注ぎ之を普通の說敎の代用とするのみならず、日曜學校又は聖書研究會の敎師等に敎訓を與へ、彼等を覺醒し、彼等を動かし又彼等に模範的解釋法を示すは說敎者の義務である」と云ふて居る。解釋的說敎を更に含味し、又之から一層大なる利益を受くるに至る準備となるものは日曜學校の敎育である。此種の說敎を爲すに當りて感ずる大困難は聽衆が聖書を知つて居ると云ふ事ではなくて、寧ろ之を知らないと云ふことである。全く未知の聽衆に說敎をし、其聽衆が說敎中に挿んだ聖書の解釋に對して如何なる興味を以て耳を傾けるかを見て、此人は常に聖書の研究に從事するか否かを判別する事が出來る。ケンブリッヂの人々は解釋的說敎を好むが、智識の程度の稍々

劣れるライセスターの聽衆は此方法を好まぬ故に、ロバート・ホールは其常習を變更して日曜日毎に二個の異れる題詞を求めなければならなかつたと云ふことである。

(二)解釋的說敎をするに當り、實際の注意となるものを擧げやう。是等の注意は經驗と觀察より得たるもの、又は他の牧師等と共に、語りて得たるもの、又は手の達く範圍に於ける最良の手本を研究して得たるものである。

解釋的說敎は、概して、聖書の解釋を主とするものであると定義を下す事が出來やう。されば其解釋の發展より生ずる處の敎理若しくは敎訓に就き議論を起し又は奬勵をなすも差閊はない。其解釋は一句に就てでも又は數句に就てでも或は長き數節に亘るものでもよい。實に續きものでもよければ又孤立するものでもよい。解釋的說敎と普通の說敎とを分明區別することは出來ぬ、題詞的說敎より不知不識のうちに解釋的說敎にうつる事もあらう。此種のうちに歷史的解釋と云はるゝものがある。それは單に聖書の物語若くは事蹟を見て念頭に浮ぶ或種の論究をなすを云ふのではなく、寧ろ主として其物語又は其事蹟を明白に活躍せしめ、之を再現せんが爲めに多分の時を費すものを指して云ふのである。是は解釋的說話の最も大切なる一種である。聖書の大部分は物語であるから、此目的を達するに適してゐる。元來物語と云ふものは老若の別なく、學者無學者の隔なく、信者未信者の差なく等しく興味を感ずるものである。併し歷史的事實に關する說敎は次の二方面に於ける誤謬の何れかに陷り易いものである。一方に於て說敎者は己が前に橫はる物語より何等かの題目か、或種の敎理か、敎訓かを演釋せんとする念慮の切なるが爲め、恰も此等のものを

羅馬書や詩篇などの句節より引出したるものと同樣に論述するのである。されば物語は其美を失ふのみか、遂には全く其跡形をも留めざるに至るのである。他方に於ては單純にして美しき聖書の話に大袈裟な叙述を施すことを努めて、其物語が敎ふる所の敎訓の一端をも示さんとする念慮も、時間も持たないのである。道は正に中庸に存す。宜しく自分勝手な描寫に時を徒費することをやめ、其事蹟を明白に活躍せしむるが如き叙述のみに限り、一段々々と話を進むるに從つて敎訓を指摘してもよければ、又說話の終に臨んで之をなすもよからう。

解釋的說敎をして有效ならしめんが爲めに最も必要なものは何であるかと云ふに、それは統一である。統一は敎示の爲めにも、說得の爲めにも、亦信仰を鼓吹する爲めにも必要である。之が缺けて居つては智慮ある聽衆の趣味を滿足させる事が出來ないのみならず、敎養なき人々も亦、其何故なるかを知るまいが、決して深き印象を受け得るものではない。然るに惜むべし、解釋的論究を爲すに當り多數の說敎者は統一を保つことを努めて居らぬ。多くは連續せる句節を取り之に就て斷片的の感想を話せば足るものと心得て居る。シュライエルマッヘルが普通の小說敎の羅列なりと評したのは此種の說敎の事であつた。解釋的說敎だと云つて、此弊に陷らなければならぬ筈のものではない。『此種の說話に統一を得るは困難なりと雖も、必ずしも不可能なりと云ふに非ず。吾人は聖書より濫りに句節を取るに非ず。選擇の自由を有するなり。題詞を定むるに當り統一を眼中に置かば其中に之を發見するは敢て難事に非ざるなり』（ヴキネー）。同一書卷の連續的解釋を爲すに當つては統一のないやうな句節を採らなければならぬ事もあるだらう。そんな場合であつても一個の構案に收むるに適

する思想のみを集め、他の思想をば看過するか、又は簡短に叙するがよからう。兎にも角にも統一を計らねばならぬ。

次に必要なのは組立。スコラ哲學者の影響に對して感謝すべきは、現代人が分解法に關し、又分解的に材料を處理したるものに大なる興味を有するに至つたことであるが、從つて多數の說教者は題目的說教を好むに至つたのである。教父等が遺したる說教はまゝ順序整然たる組立に於て缺る所があり、時には統一が乏しいこともある。乃ち或人々は說教は教父等の模範に從ふの外なしと思惟し、現代人の趣味と思想の方式とを全然無視せんとして居る。けれども聖書の比較的長い章節と雖も其選擇と其取扱とが宜しきを得ば、一定の題目と明確にして秩序ある構案とを有するを得べく、而も其題詞の說明に大部分を費して解釋的說話として何等遜色なきを得るであらう。我等の大に注意すべきことは是である、即ち解釋的說教であつても統一と、秩序ある組立とを有し得るもので、又之を有しなければならぬと云ふことである。

經驗の少ない說教者が解釋的說教を爲さんとの考を起すや、直樣毎週々々連續的解釋を試みんとするのである。彼は續き物を說教しやうとする。併し時々は孤立して居る句節を採り之に解釋を加へ、此種の說教に自分を練り、同時に會衆をも慣らすやうにするがよい。少しく練習を積み、尙論究せんとする書卷を再三詳細に研究したる後に續き物の解釋に從事するも遲くはなからう。よく人が爲す事であるが、最初に詩篇を試みてはならぬ。概して詩篇は外觀上の統一を缺き、はつきりした連絡と規則正しき開進とを持つてゐないから、之を有效に取扱はんとせば餘程練習を積んで居なければならぬ。時には長い本

文を取り、丁度短い題詞に基づく普通の題詞的説教に於けるが如く、其本文に就き、それより種々の思想を集め來り、之を用ゐて題詞的説教を作るも可からう。或は又簡單な題詞を提示して其題詞が一部分と成つてゐる數節の論究に亘つて説教するも可からう。

是より連續的解釋の場合に就て一言しやう、既に一寸一言した通り、第一に爲すべきことは續き物としやうとする書卷の全體、若くは聖書の或部分を前以て周到に研究することである。各書卷全體に亘りて觀察し、其内容の全部を把持し、然る後詳しく其物語若くは議論の進行を辿るは、餘り實行を見ない聖書研究法である。説教者が此方法に依りて聖書を研究するに至らば解釋的説教は一段の進歩を見るであらう。概言すれば何人でも先づ聖書の解釋的研究を喜となし、其一言一句の正確なる意義を穿鑿するを愛する人ならでは、解釋的説教に上達することは六ヶ敷と云つて差支はない。之を爲すには聖書の原語に通ずるは、勿論望ましい事には相違ないが、必ずしも之を知らなければならぬものではない。此種の説教に大に力を用ゐて成功したアンドリユー・フルラーはヘブル語やギリシャ語の知識のない人であつた。けれども彼は聖書の言々句々の研究を好んだ人であつた。その著書を見れば彼は單に句節の一般的意義を捉ふるを以て滿足せず、其正確なる意義を知らんとして非常に苦心した跡が歴然として居る。

米國に於けるバプテスト教會牧師中の最も雄辯家の一人なるアンドリユー・ブローダスは解釋的説教の天才であつたが、此人も亦ギリシャ語やヘブル語を知らなかつたのみならず、又多數の註解書をも所持しなかつた。而も彼は神の言の意義を熟考し、且つ之を語ることを何よりの樂しみとしたのであつた。今日註解書の數は夥しく增加し、日曜

學校に於ける聖書研究は至つて盛なるのみならず、原語に通ずる人々も以前に比して幾倍するに至つたが、聖書を忠實に熱心に忍耐を以て喜んで研究する人々は昔よりも却つて少なくなつたのは殘念なことである。說敎者が會合する毎に彼聖句此聖句などに就て互に談ずるが常であつたが、こんな事は今はすたつてしまつた。我等が廣く讀むも有益であり、又修養の爲めに短き部分を讀むも靈性の爲めに必要缺くべからざるものであるが、特に大切なるは聖書を眞面目に研究することである。然るに多くの場合に於ては單に次の日曜日の爲めに題詞を研究するのみに限られて居ると云ふ有樣である。最も大切な事は聖書の或書卷、若くは聖書の或部分に就て解釋的說敎の續き物を爲さんと心を定めたる後は、最良の解說的註釋書の數種を用ゐ、一般的內容と連絡とに特別の注意を向けて、それを前以つて研究することである。其書卷を暗誦するも惡くはなからう、兎に角徹頭徹尾思想の脈絡並に事實の系列を悉く念頭に彫込まなければならぬ。

續きものとして論究せんとする全部に亘る諸說敎の大體の設計を作つて置くも可からう。離れ〴〵の句節の解釋に從事した以前の經驗があるから、之は左程困難ではなからう、勿論其續きの進むに從ひ、必要に應じて之を變更するがよい。前以て大體の設計を立て、置く大なる利益は其書卷の種々なる題目を最も公平に配置することが出來ると云ふことである。例へば羅馬書に於ては始めの三章に種々の問題が指摘されてあるが、それらは後章に於て更に充分に論ぜられてある。されば此等の問題が始めて現はれた時に、それを一般的に論究するのは面白くない。其場合には此等をたゞあつさりと考察するにとゞめ、此等の問題が再說されてある場所に及んでから之を詳論するの餘裕

を保留して置くべきである。けれども最初から說話の一定の數を告げて置くは可くない。續き物とする事などは通例告げぬ方が優つてゐる。進行は餘り遲くなつてもよくない、可成は現代の性急なる精神に叶ふやうな歷然たる進步がほしい。然しながら特別に面白き句や節に遭遇した時には暫く止つて之を論じ、場合によつては之が爲に說敎全體を費してもよい。進步あると共に變化がなければならぬ。聽衆は說敎者が聖書の言葉の外部的長さに關して云ふのでなく、其の內容の豐富なる事に關して論ずるのであると云ふのを見て、滿足を感ずるであらう。

さて是れから特種の論究を組立るのである。我等の前に橫はる句節は統一を有するのであるから、それに基き題詞的說敎に於けるが如く、諸項目をそれより發見するのである。かくして一個の組立と、一個の論究とを爲すのであつて、離散したる話をするのではない。此の全體の事柄に於て一番に六ヶ數事の一つは詳細の點を適當に取扱ふ事である。單に其の句節が與ふる處の題目と項目とを取つて自ら勝手に之を論ずるは題詞的說敎であつて解釋的說敎ではない。我等が目的として居るところのものは嚴格なる意味に於ける解釋的說敎であつて、其聖句の主要なる諸觀念が誘出さるゝのみならず、其の詳細の事に至るまでも適當に說明せられて、其の論究の主なる材料とせらるゝものを云ふのである。是を處理せんが爲に我等は詳細の點を周到に研究し、それ等に壓せらるゝとなくして、其等を支配するのでなければならぬ。かくて我等は其の聖句の精神を充分に體得するに至り、然る後我等は選擇し、之を區分しなければならない。無經驗の說敎者が誤るのは此處である。かゝる人は聖句の詳細を綿密に研究し、之に就て

興味を感ずるや、自分の問題の範圍外の多くの事柄に就て語りたがるのである。かくてあまり多くの事を云ふのであるから、聽衆は其の論旨を辿る事が困難になり、說敎者自身も亦何れの點に就ても充分に考へを述べる事が出來ずに終るのである。故に選擇は缺く可らざるものである。されば說敎者たるものは特別に說明しなければならない樣な事柄や、又甚だ大切にして面白き事柄を採る事を目的とすべきである。時には其物語にあまり本質的に大切でない事や、些細な點や、議論上の第二位に屬する連絡點などが却て論究の力と活氣とを大に增加することがある。辯舌的叙述に於てはデモスセネスやタシタス等の爲せるが如く特に想像を喚起するに力となるやうな二三の叙述上の仕上をしなければならない事は誰も知る所である。論究の辯舌的解釋に於ても同じやうなものではなからうか。我等は與へられたる聖句の梗概と、主要なる思想とを示すのみならず、全體の議論を引立せるやうな事柄を選擇せんが爲に努力しなければならないではなからうか。記憶すべき事は我等は註釋書や敎理上の論文を書くのではなくて、解釋的說敎をするのであるから、全體の取扱に於て辯說的でなければならぬと云ふ事である。

時々起るところの誤謬は**他の聖句を引照**する事が多過ると云ふ事である。かくて題詞の詳細の事柄のみでも辯說的目的の爲には多過る程であるのに、それに他の聖句の引照を多量に加へるのであるから、とても耐へきれぬ程のものとなつてしまう。或る說敎者は聖書を多く引く事を以つて聖書を尊敬する所以であると思つて居るやうであるが、それは自らの怠慢に對して尊敬を表するにすぎないのである。勿論聖書の他の部分より正當なる引照をなすは適當なるものであつ

て、時には非常に有力なものである。

又題詞の中に起る困難なる句節の取扱に關して陷り易き誤謬もある。勿論說敎者は困難を無視すると云ふやうな習慣をつくつてはならないのであるから、大なる注意を以て之を研究しなければならぬ。然し注意すべきは、說敎者は題詞のこの困難なる部分に對して多大の興味を有し、其の點に關する種々の見解を熟知し、相互の意見に對する辯駁等に通じて居るが故に、自然其の材料を用ひ、且つ自分が面白く感ずる處の問題を大に論ぜんとする傾きを有する事である。多くの解釋的說敎が失敗したのは此點である。說敎者が實際に困難を取去り、且つ比較的に簡單にして一見滿足すべき說明を施す事が出來れば、人々は喜んで之を聽くのである。如斯說明したる所の聖句は有益にして興味ある眞理を含むものなる事を示聽さば、衆は大に滿足を感ずるのである。說敎者が長い間研究したる結果を簡單に述べて、六ヶ敷聖句に光明をはなつ事が出來れば結構だ。けれども長き研究と云ふ事は說敎者の側の事であつて聽衆の側の事ではない。說敎者が興味を感じて居る事は聽衆も亦興味を感ずるものであると思ふのは有勝な誤謬である。故に自分の研究の結果が滿足すべきものでなく、又自分が其の事柄を說明し得ると思はれぬ時には、單に此處に困難があると云ふ事を告げ、其の聖句が確實に敎示する方面の眞理のみを話し、自ら了解して居ると信ずる所のものゝみを取扱ふべきである。註釋書に對して屢々聞く所の非難は容易い場所に就ては多く書いてあるが、六ヶ敷き場所に就ては書いてないと云ふ事である。說敎者は正しき意味であると信じて居らない事を述べたり、之を應用したりする權利を有する者ではない。句節の意義に關して種々異なりたる見解を長々

と叙し來り、どの見解を取るべき者であるかと云ふ理由を示さず、人をして歸着する所を知らざらしむる書は讀むに堪へざるものであるが、如此說敎も亦聞くに堪へないものである。

解釋的論究の進むに從つて既に論じ來りたる所の全部を時々回顧する事によつて聽衆の念頭に題詞全體の連絡を保たしむるは望ましき事である。クリソストムは此事の巧なる模範を示して居る。彼は又、度々次に來るものに關し何か人の氣を引くやうな問題を發して聽衆の注意を喚起し、愈之を述るに當り人々の傾聽を促す事を計つて居る。今日の聽衆は彼の時代の聽衆のやうに一般に聖書を持參して居らぬ。故に我等は此の缺陷を補ふ事を努めなければならぬ。題詞の主要なる思想を明白ならしめ、詳細の事を巧みに選擇配置し、進むに從つて或は後を顧み或は前を望む事によりて此の重大なる實際上の困難を大に除く事が出來るものである。

題詞が與ふる處の敎訓を指摘し之を應用する爲に苦心しなければならない。應用が一目瞭然たるにあらざればそれを明かに指摘する必要あり。聽衆も亦之を望むものである。時には論究の一段落毎に應用を爲す事が便利であらう。殊に歷史的解釋に於てはさうである。然しながら多くの場合に於ては、普通他の種類の說敎に於けるが如く、主なる實際的の敎訓を結論まで保有する事が出來る。解釋に對して多くの時が必要なのであるから如此敎訓は概して簡單にしなければならない。然しながら特別に大切な實際的の問題であるならば題詞の或る部分の解釋は捨ても其點を論じ、時を費して其の事を勸めてよい。時事問題とか、聽衆の宗敎上の狀態等が、當然其の題詞に基て居らない或る實際的の題目を論究する事を特別に促す場合には、注意とし

て、若しくは或る一般的の眞理又は義務に關する緣の遠い應用として述べてもよい。茲にクリソストムは又模範とするに足る。彼は喜んで聖書の說明をしたが、實際的の事は說敎に於て最も大切な事であると感じて所々に多くの敎訓を指摘するのみならず、結尾に於ては必ず何か實際的の問題を引出し、之を可なり長く論ずることも稀ではない。之を爲すに當り、彼は必ずしも觀念聯合の道を辿つて大切な實際的の事柄に到達せんとはしない、嚴格なる意義に於て說敎の組立に許さないやうな事をもやつてゐる。例へば主の變貌に就ての說敎に於て彼はアンテオケに於ける金貸業者を責んとして次のやうに言廻はして居る。三人の弟子は山上に於ける基督の榮光を以て喜んだ—我等も亦一層耀きたる榮光に於て主を見んことを望むものである—併し之を見んとすれば我等はどんな世渡をして居るかを自ら愼まなければならない—斯々しかゞの事をしてはならぬ、貧しい者を困しめてはならぬ—と云ふ風に述べ、更に進んで高利を貪ぼる事に說及ぼし、之に暫くの時間を費して威嚇と哀訴とをなして居る。彼は又一層廻遠い道行を踏んで五千人に食を與へたる事蹟より出發して、其當時の流行であつた華美な刺繍や奇異な履物を旺んに攻擊して居る。非難や奬勵を新に爲すの必要を感ずるに當つてはどうかかうか、其端緒を發見して其問題に立歸るのである。勿論此事に關し彼は模範として缺點なしと云ふのではないが、極めて敎訓的であると思ふ。既に論じた通り我等はクリソストムの說敎に見るよりも更に多くの統一と、秩序ある組立と規則正しい開進が欲しい。併し餘りに窮屈に考へ過ぎて、時々自由自在に實際的の事柄に說き及ぼすことを遠慮するには及ばない。斯くせば人々は何か自分々々に實際に當嵌る事柄に就て始終氣

を付けて居るから、我等の説明に一層耳を傾けるものである。且つ又人々が忘れ勝なる聖書の眞理と日常生活との密接なる關係を常に念頭に浮べしむるによい。時々牧師等は、解釋的説教の續き物は教會員の實際の有樣並に其要求などに適應するやうなことを毎週語るの妨となるの虞があると思つて之を躊躇するが、以上の注意に從はゞ此困難は除去されやう。現今一般に行はれて居るやうに日曜毎に二つの説教を爲すに當つては、一の説教は自分が望むがまゝの特殊の狀態に適應させることが出來やう。

以上講究し來りたる事にして誤なしとせば解釋的説教は困難なる事業たるや明かである。是は聖書の精細なる一般的研究と、論ぜんとする句節の特殊の研究とを必要とする。解釋的であつて而も辯舌的であり、詳細に亘りたる豐富なる資料に滿ち而も之に束縛せられず、聖書に基づくと同時に實際的活用に適する論究をなし、かくて無學愚鈍なる人々や世俗的人心を導き來つて聖書の一部分に興味を感ぜしめ之より益を受けしむる―之は勿論困難でなければならぬ。されど屢々云はるるが如く、諸子も聽衆も慣るゝまでは先づ日曜日以外の夜の集會に解釋的説教をするが可いとは云はれない。否寧ろ時々の日曜日の主要な説教として、何等通常と異つたことを爲すと云ふ豫告を與ふる事なく、たゞ之を教訓的に、興味あり、印象を與へるやうに爲んがために最善を盡すべきである。然らば諸子も又聽衆も解釋的説教に慣るゝであらう。時々之を試むれば續き物の解釋的説教を如何にして準備すべきかを知得するであらう。容易いものであると思つて之を始むる人は解釋的説教は非常に六ヶ敷ものなることを發見すべく。最初六ヶ敷ものであると思つて之に當る人は經驗を積むに從ひ年々

益容易く、益愉快なものなることを發見するであらう。萬人が悉く解釋的說教が自分の心的才能に最も適して居るを發見するものではない。併しながら何人でも巧に又有効に之を使用せんが爲めに能力を養ふべきである。概して他の種類の說教に長ずる人であつても、時々解釋的說教を試みると同時に、題詞的、題目的說教の多數のものにも一層多量の解釋的の要素を注入するが可からう。次の事は誠實に斷言して可い、則ち解釋的說教は自分には不適當であると思つてゐた多くの人々も、以上講究し來りたるが如き原理に基づき勉强と實習とを積まば解釋的說教を聽衆に甚だ有益ならしめ、自分にも殊に愉快に感せしむるやうに爲すことが出來るものであると。

第三編　體裁

第一章　體裁總論

一、體裁の性質、及び其大切なる事
二、體裁上達の途

第一節　體裁の性質及其大切なる事

吾人は屢々某氏の筆は輕妙であるとか、優麗であるとか又は鋭利であるなどと云ふが體裁即ちスタイルと云ふ言葉の起りも之と等しい。即ち之は羅馬人が蠟塗の板に物を書くに用ゐた尖端を有する鐵製のものの名より生じたのである。シセロは此語を書體、並に人々が其思想を文字に寫して現はす體裁を指すことに屢々用ゐたが後世に及で

自然話振にも應用する樣になつた、近世此スタイルと云ふ語は類比法によりて更に廣く用ゐられ、美術にも、服裝にも、其他樣々なる事物に應用さるゝ樣になつた。されば或人の體裁とは文章に於けると演述に於けるとに拘はらず其人の思想表彰の特徵を指して云ふのである。

何人も各自特有の手跡を有して居る。始めには手本を摸寫するのであるが間もなく之が獨得の體裁と化するのである。之と等しく、更に高尙なる意義に於て、何人も其人自身の體裁を有つて居る。如何に盲從的の摸寫であつても決して完全に達する事は出來ない。よしや之をなすとも其人の性質は其體裁を變化するに至るものである。實にバフオンが云へる如く「體裁こそ人なれ」とは眞である。此言は面白くもバフオン自身に其眞なるを證明して居る。彼の體裁は立派で極めて華麗であつたが、彼は盛裝して筆を取るにあらざれば書く事が出來なかつたと云はれて居る。ランドルは又同じ意味の事を「言語は其人の性質の一部分である」と云ふて居る。又レッシングは「人各々自分の體裁を有する事猶自分の鼻を有するが如くならざるべからず」と云ふて居る。此點についても、一個人に於て最も特徵とする所のものは、其個人性を失ふ事なくして、之を修養し又無限に改良する事が出來るものである。

體裁と云ふ語は其人の思想表彰の樣を、比喩的に表はす言葉であるから、場合が異なるに隨て色々異樣の意義に用ゐらるゝと云ふ事は怪むに足らぬ。時として此語は排列をも含み、又は全體の議論、若くは辯說をも含むのである。然れども一般に亘る排列は通常此言葉の內に含まれて居らぬ。かく體裁は甚だ大切である。一個人の體裁を其人の思想の傾向並に其人の心意の特質より分離する事は出來ぬ。普通

吾人が思想の服裝と呼ぶ所のものとは違つて居る。體裁はウォルズオルスが云へる如く單に服裝にあらずして思想の化身である。我等はかく啓示された時に、又かく化身した時にのみ、他人の思想を知るのである。アリストートルは「體裁の事は修辭學に、至つて近來附加へられた一問題であつて、教育の何れの方面に於ても多少考へなければならぬものであるが要する所證明は最も大切なり」と云ふてをるが彼が體裁を稍々輕んじたと云ふ事は實際である。彼は己が意見を實行した人で、彼の體裁は不注意にして粗雜なるのみならず、屢々殆んど了解に苦しむ程曖昧なる者がある。されど詩歌、歴史、或は辯說に使用せし彼の言語の內には、何人も之に優る事が出來ぬ程高尙な體裁の實例が澤山ある。體裁の上に於ては大なる缺點あるにも拘はらず大に稱讚に價する程、高貴なる物を有する事アリストートルの如き人はあまり

多くはない。廣く又永き感化を與へたる辯士並に著者等は通例善良なる思想を有せしのみならず、又之を表はすに當つてもよき體裁を用ゐて之を成就したのである。實に他の方面に於てはあまり感心の出來ない著者であつても、體裁が優れて居るが爲めに、世の好評を博し、永く人々に喜ばれたるものも尠くない。ゴールドスミスが物せし歴史書の如き、其當時の歴史上の智識の程度より云はゞ、至つて不正確にして又極めて粗笨たるを免れざりしも、其文体の美はしきが爲めに諸學校に於て久しき間使用せられたのであつた。又彼のルナンが公にせし空想的の基督傳が、少時の間なりしと雖も、多くの人々に博く讀まれたのは、單に其內容が醉狂的の記事を以て滿されたが故ばかりでなく、其文體が、殊に佛蘭西原書に於ては、極めて美なるに基いたものである。ルナンはゼスイト大學に學べる頃、體裁を養ふ事に大に注意を拂ひ、其

後語學並に文學の研鑽に主力を盡した。之と同じく、美はしき體裁を有せしが故に人々に喜ばれた科學書もある。パフオンの物理學の如き是である。英語を語る國民の間に地質學の知識が一般に傳はつたのは、ヒユー・ミラーの著述上の才能並に斬新奇拔なる氏が文體に負ふ所實に多かつた。後世に及んでアガスイ、ハクスレー、チンダル等は同じ事をなした。以上の事實によつて見れば體裁は單に裝飾物でない事が明らかである。體裁は軍人の劍の光、其榮であると同時に又其鋭き刄端である。是によりて、平凡なるものをも力あるものとなし、力あるものを更に力あるものとなす事が出來るものである。又之を惡用すれば誤謬は益々人を迷はすに至り、之を善用するに非ざれば眞理は其儘に隱るゝであらう。宗教上の教師たるものがかゝる有力なるものを等閑に付してよからうか。パウロが「我言ひし所また宣べし所は人の智慧の婉言を用ゐず」と云ふたのは眞である。彼れは急速の勢を以て日進月歩しつゝあつた彼の通商繁榮の都に於て、非常に人望を博して居つた當時の似而非なる哲學や、奇狂的にして虛飾的の修辭學などを論ずる事を屑しとしなかつた。之に反して彼れの体裁は熱心なる精力の手本、人爲的を離れて極美の點に達したものである。

米國に於て体裁は大に等閑に付されて居る。透徹、雅致、活氣（勢力があるとは云はれないかも知れぬが）の點に於て現代の國民中最も秀れて居るは佛國人であらう。併し英國人中の教育ある者にありては、佛國人の及ばざる程精練なる体裁を有して居るものがある。大學教育に於て英國は樣々なる缺點があるにも關はらず、此點に於ては大に面目を新にして居る。之は國會に於ける大演說や、英國の誇たる新聞紙用語の美はしきものに於て見らるるばかりでなく、尙又說教に於ても

見る事が出來る。彼の有名なるオクスフォード、トラクトが非常なる感化力を有せしは其美はしき体裁が與つて力あつたのである。此點に就て大に稱讃すべき價値あるものはゼー・エーチ・ニューマン、ロバルトソン、リッドン、ビショップ・ウイルバーホース等の說教である。十九世紀の英國が誇とすべきものはロバルト・ホールである。獨乙散文の体裁は二三の例外はあるが一般に甚だ憾むべき有樣である。殊に宗教的の著書等に至つては更に甚だしい、彼等の責任は讀む人聞く者をして了解せしむるにあると云ふ事を感せず、單に自分にのみ解る樣な風に思想を表はす事を敢てし、他人が之を了解すると否とは少しも關せざるが如く見える。換言すれば彼等は体裁の主觀的の美を求めて、客觀的の美を顧みない。併しながら當今獨乙語の演說者並に著者等中、チュートン人特有の偉大と勢力とを失はず透徹と溫雅とを具ふる

體裁を有する人々の數が急速の勢を以て增進して居る。米國に於ても、或は世間一般又は宗教界に於ける著者、並に辯說者中模範とすべき人々の數は日々加はつて居る。しかしながら一般に云はゞ米國は英國に及ばざる事甚だ遠く、體裁に關し極めて等閑疎野の風が一般に行はれて居る。著作に於ても、或は辯說に於ても、米國の一大缺點は過度に熱烈なる體裁を重視し過る事と、不斷に奇拔ならん事を努むることである。米國人の體裁は演述法に關しても、惜むらくは平靜にして綽々餘裕あり、靜かながらも尙熱心で、折々熱情に走るが如きものを缺いて居る。「些細の事柄は極めて平易なる言葉を以て話し、又普通の問題に關しては普通に話し、大問題に關しては熱情と勢力とを以て話す事の出來る人は雄辯家である」。(シセロ)

米國に於ては、又幾分か英國に於ても、說教の體裁について充分に力

を盡して居るとは云はれぬ。其一の原因は、體裁が思想と不可離の關係を有すると云ふ事を了解せざるにある。デクインシーが云ふた「是英國に於ては何事に於ても方式よりも實質を尊び、外觀よりも內容を重んずると云ふ主義に基いて居る。此主義は眞に高貴なるものなりと雖も、其方式と實質とは離るべからざる關係を有する場合に於ては、必然當を得ないのである」と。最良の體裁は人の注意を惹く事最も少きものであつて、其長所を玩味するものは批評的の觀察者のみである。大抵の人は重を全く其實質にのみ置き、方式が人をして實質に耳を傾けしめ、又感動せしむるに如何に力あるものなるかを知らぬ。成程主なるものは思想であるが體裁も亦大切である。「古來人類の經驗が教ふる所、又あらゆる師表等が證明する所は、次の如き二つの事の離るべからざることである。即ち(一)面白き思想の資料たるべきものなくて善良な體裁があり得べしと思つてはならぬ。(二)面白き多量な思想があるからと云つて、體裁が自然に出來るものであると思ふてはならぬ」。

是に由て之を觀れば、苟くも著者たり辯士たらんとする人は體裁を改良するが爲めに大なる注意を拂はなければならぬ。體裁に於て秀逸ん事は眞に六ケ敷い事である。一個の辯說、一節、一行であつても、建設的の想像によつて組立られたる藝術品は、他の種類の傑作と等しく、甚だ稀なるものである。併しながら何人でも長い間充分に勉め、怠ることなくば己が考を發表し深き感じを力强く述べ、又少くとも可なり美しい衣裳を以て己が思想を粧ふことが出來るものである。有名な著者又は辯說者の中で良き體裁を得んが爲に特に困難を感じた人々もある。即ちジョン・フォスターの如きは其一人であつた。しかしな

から是等の人々が成功したのを見て我等は大に勵まさるゝのである。

第二節　體裁改良の途

體裁にも色々な種類があるが、辯說の體裁は其一種で、說敎の體裁は又其內の一種屬である。一個人の特徵的體裁は著述にも辯說にも本來同一に現はれるものである。故に我等は左に單に辯說に特有な體裁に關するのみならず、寧ろ體裁全體に關し之が改良の方法を講じやう。

(一)國語、殊に己が屬する國の言語の研究は此點に關して有益なるものである。國語學は本世紀間に盛に起つたものであつて、尙今日も急速の勢を以て進みつゝある科學であるが、此學を學ぶの興味並に實益は敢て他の科學に劣るものとも思はれぬ。併し此科學を科學として研究する事は單に體裁の上に間接の關係を有するに過ぎぬ。寧ろ諸の國語を研究する方が更に大なる利益を得るの途である。若し一定の組織的研究法に據り、確乎たる原理に從ひ、國語を研究するに當つては、國語一般の性質、言語の歷史、即ち其變化、主に其內容並に言語の分解的組立や諸種の思想の形態、其表彰の手續等に關して、綿密細心なる注意を拂はしむるに至るものである。のみならず己が國語の特徵に對し、普通の人々よりも、更に鋭き更に深き注意を與へるやうになるものである。是等の利益は如何なる國語を研究するに於ても多少得る事の出來るものである。心を盡して他國語を研究するは辯士たるものゝ初期に於て缺く可からざるのみならず、成たけ一生涯之を持續したいものである。秀逸なる体裁に達した人々は大抵之を持續した人々であつた。

外國語を知ると知らざるとに拘はらず、先づ己が國語を熱心に研究

しなければならぬ。外國語を研究せんとする人々は英語によりて最も有益なるたすけを得る事が出來やう。尙獨逸の一語學者が云へるが如く「英語は近代の最大最良の詩人を生み、又之を養成せしは敢て偶然の事にあらず。此語は世界語と呼ばるべき資格を有するものなり。此語は尙英國民の如く地球の全面に此後擴張すべき命數を有するが如く見ゆ。其豐富なる事、其趣味其組立の綿密なる事、當今話さるゝ言語中之と比較すべきものなし、實に我が獨逸語と云へども我等の分裂せるが如く分裂せるものにして、先づ多くの缺點を取り去るにあらざれば大膽にも英語と競爭者の列に加はる事能はざるなり」と。英語は伊太利語程音樂的ではなく、又佛語程會話に適するものではなく、又獨逸語程新熟語を作るの便宜を有つて居る者でもないが、全体から云はゞ、歷史にも、詩歌にも、哲學にも、辯說にも、交際にも、實業にも、現在に於て之と競ふべきものは他にない。廣く人々に知られて居る一著者は此語は「文法なしの言葉」であると云ふたが、英語には矢張り文法が有り又規則正しき作文法が有る。併しながら敎育のある、力のある人であつても屢々其法則を破る事がある。

一般に云はゞ說敎者の言語は現代の使用たる純粹なる國語でなければならぬ。街衢(ちまた)や新聞紙上に見聞するが如き新奇なるものを使用するに急ならず、又古書に見ゆる古語、即ち聽衆が容易に了解しない言葉を使ふてはならぬ。又說敎者は或地方にのみ使用さるゝ言葉(特別なる理由あるにあらざれば)を用ゐず一般に使はるゝ言葉を話さなければならぬ。說敎者は決して新らしき言葉を發明してはならぬ。スタール夫人は云へた「新に言葉を發明すること程、思想の缺乏せる事實を明示するはなし」と。實に此語は如斯發明を以て創作的の記號なり

と感ずる人々に呈するに足る。又極く特別な場合を除くの外、外國語を使用してはならぬ。或時代に於て說敎中に牧師が拉典語又は希臘語を引用するは極く普通であつて、又之が適當であると思はれた。ウエスレーは主に平民に說敎をした人であつたが、彼の說敎の中には以上の如き引用語が甚だ多い。併しながら當今之を廢する樣になつたのは趣味の進步を現はすものである。當今の辯說が外國語を用ゐる場合は國語にて不充分なる時のみである。聖書の原語に引き照す時であつても、希臘語や希伯來語を引いて良い場合は極く稀である。

(二)國語の研究よりも體裁を改良するに更に有力なるものは文學の研究であらう。讀書によりて我等は言語の智識殊に用語の數を增し、發表の力を養ふ事が出來るのみならず、主に讀書により我等は文學上の趣味を養ふのである。シセロは希臘文學に關し、彼が作中の人物をして云はしむるに「太陽の光線の下に散步を試むるに當り、我散步の目的は他にありとも我が顏色は日に焦さるゝが如く、是等の書籍を讀むに當り我が辯說の體裁も亦其影響を蒙るに至る」と。又セキスピヤが發せる悲哀の言は之を更に高尙なる事柄に應用しても其眞たるを失はぬ。

「我性質の我が從事する事物の制を受くるは
猶染屋の手の藍に於けるが如き歟」

體裁の正則原理を知得するに至るまで精粹なる文學と親み我等の趣味が高きに達するまで勉めて之を養ひ、是非の判斷を容易に、且つ正確になすに至らば、其好果之より優るものはなかるべく、又其快云ふ可らざる者があるであらう。

善良なる文學を研究するの必要はかくの如き積極的利益の爲めの

みにあらず、尙又執拗强力なる惡感化に打ち克たんが爲めである。生れながらにして雅致あり力あゝ話をなし得る者、又正確な國語を話し得るものは殆んどない。成長するにつれ新聞雜誌を讀み、人の話を聞きなどして自然に作り上げた體裁は至つて拙劣なものであるが、此影響を蒙つて居らぬ人はない。敎育ある人々の演說にも發音並に文法上の誤謬は屢々聞く所であるが、之が趣味を傷る事少なくない。此惡影響を矯正せんとせば不斷最良の文學に親しむより外に良策はない。デクインシイは新聞紙の增加が會話の體裁に害毒を及ぼした事實を指摘して居るが、實に新聞を常に讀む所の人や、新聞記者等は極く平凡なる事を論ずるにも、常に六ヶ敷誇大なる言語を使用し、又重大なゝ事物を論ずるには極めて嚴格を欠くが如き言葉を使ふて居る。當今新聞用語の欠點の如何に多大なるかを論ずるは寧ろ愚の業であらう。

良い體裁を得んと欲する人は此理由及び他の理由に基づき新聞紙の選擇を忘れてはならぬ。說敎の體裁はいつも當然時代の文學の影響を蒙るものであるから其文學が野卑なる時代に於ては此弊害より逃んが爲めに現代並に前代の名著を熟讀すべきである。

我等は英語並に他國語に於て物されたる名著の尠からざるを思ふて喜を催さゝるを得ぬ。英語の宗敎文學は說敎に於けると、他の著述に於けるとに拘はらず、立派なる體裁の標本とすべきもの多ければ、之を味ひ、知を研き、心を溫め、趣味を高尙にするに足る。されば人各自ら必要を感ずる方面のものを選擇すべきである。佛國に於てはボスエ、ー以下モノー、米國に於てはジエー・エム・メイソン、アール・フルラーの如きは何れも雅致と熱情とを交へたる稱讃すべき適例である。直截銳利なるバンヤンは純潔にして美はしき點に於て知られて居る。乾

燥無味なる體裁を有する人は宜くクリソストム、ゼレミー・テーラー、チャルマース、及びメルヴル等を讀むがよい。體裁の大標本として、其雄大なる美と訓練を受けたる力量に於て、さながら希臘青年競技者の秀でゝ輝くが如きものを求めば先づロバルト・ホールを指さなければならぬ。彼の著述も說教も共に則とするに足る。ホールを學んで千篇一律あまりに高調に失し、日常の言語に下る事なく、又卑近な個人的應用を缺いで居ると云ふ傾きを認むる人は之を矯正せんが爲めにスバルジョンと親しむがよい。併し我等の手本とすべきものは決して之ばかりではない。他にまだ〳〵多い。大切な事は讀書は矢鱈にすべきものでないと云ふ事である。己が心の性向、從來の敎育、現在進步の程度などを參酌し、己が思想の傾向と、自ら體裁に關して好む所の特別な傾向とを考へ、最もよき助言に從ひ實際に自らの要求を最もよく滿足するが如き著書を選定すべきである。

英語聖書を常に讀み又之を綿密に研究する說敎者は必ず體裁に關して大に得る所あるに相違ない。聖書にはあらゆる種類の體裁と、各其類に從ひ種々變化せるものが備はつて居る。普通に使用せらるゝ英譯は其內に用ゐられたる語句中今日既に不用となつたものもあるが、尙ほ英語の最も美はしき形態を遺して居る。此譯は英文學の黃金時代に成りたるを以て、スペンサーがチョーサーに與へた稱讚辭、純粹英語の源泉」と云ふ語を最高の度に於て當嵌める事が出來る。

一般文學に通ずるの外、猶辯護士、政治家等が屢々大說敎家の演述風を學ぶが如く、說敎者も亦世の雄辯家より多く學ぶ事が出來やう。此事は單に初學者に取りてのみならず、熟達したる辯士にも大切である。同一の原理の、全く異りたる材料と目的に適用せらるゝを見て、此等の

諸原理を新に了得するのみか、之によりて形式に陷りたる排列や單調に失したる體裁の弊を防ぐ事が出來る。辯說に於ても、亦一般文學に於ても、豐富なる軌範を有すると希臘語並に英語に匹敵するものはないのであるから、說敎者は若き時も、年老いたる時も、大に之を學ぶべきである。實に文學程知的並に審美的の修養に良き影響を及ぼすものはない。併しながら青年研究者は、如何なる作者も皆完全なる標準とすべき者であると思ふてはならぬ。時に多少の缺點があるからと云つて、最も大なる作者を退くるが如き事があつてはならぬ。「多少缺點のない作者等は一人もあるまい。趣味上の缺點と云ふものは最高の作者並に最低の作者にも極く有り勝ちの事であらう。セクスピヤ、ミルトンの趣味と雖も必ずしも責むべき所なしとは云へぬ。然れども、アダム・スミスの云へる『其缺點をも醜からしめぬ程の力量を有する名家は如何に偉大ならずや』との讃辭を受ける人は大作者と云はねばならぬ。若し我等が缺點なき作者を發見せんとせば、最大の作者等に之を求むるは無益の業である」。オーガスチンは青年時代に於て修辭學の敎師であつたが、氏は從來諸先輩が體裁並に演說法について敎へた人工的の敎訓は極めて愚かなるものであつたことを認め、又正當なる修辭學と云ふものは、更に高きものに達するの一助に過ぎぬものであることを認めて居た。彼は云ふた「加之雄辯と知慧とを綜合せんとする人に向つて勸めん。修辭學者に學ぶよりも寧ろ雄辯家のものを讀み、又彼等の演說に耳を傾け、彼等を摸倣して練習するは前者にまさりて力あるものなる事を。但しかゝる志を有する者は單に其雄辯に於てのみならず又智慧に於ても古今に通じて有名な人々のものを見聞せざるべからずと。

文學者の興味ある傳記を讀むことも有益で又面白い。例へばメ！ソンのミルトン傳、ロックハートのサー・ウオーター・スコット傳、トレヴエリアンのマコーレー卿の傳記並に書簡等の如き貴重なるものもある。

會話殊に智慧ある婦人の會話は明晰と、活氣と、變化と、其他樣々の方面に於て人の氣を引く樣な體裁の賞讃すべき有力な適例とするに可い。書簡も又有益である。デクインシーは文體論に於て「今諸君が我貴き國語の精美と其常用語の美妙雅致なるものとを讀まんとせば、宜しく郵便遞送囊を窃取し、其内より女性の筆跡を有するあらゆる書翰を開封するに如かじ」と。シセロの書翰は、普通の人々には、その演說よりも更によき手本である。

(三)體裁上達の方法として主要なるは演說と作文とを鋭意實習することである。無造作に練習すると云ふのではない。不注意に之を爲さば長所を發揮せざるのみか、短所をも增長せしめ、且之を固着せしむるであらう。

之を作るに當て細末の點を看過するは極めて普通の事であるが、是甚だ思はざるの至りである。文字を誤る人は之を矯めんが爲めに大に努めなければならぬ。僅かの忍耐と組織的方法に依らば之を成就するは左程困難ではなからう。此方面に費したる苦心は決して無益のものではない。且之は單に文學上の缺點を取り去る益あるばかりではない。苟も細微の事に至るまで正確を保たば自然之が吾人の心意の常習に反映して効果を及ぼすものであるから、作文の興味をも增すに至るのである。正確な文字を書くことは必要であるが、文章に句點を附する事も極く大切である。

文法上のあらゆる微細なる點に關しても注意を怠つてはならぬ。文法上の正確を保つことは吾人の熱心に追求すべき價値あるものたるや敢て問ふまでもあるまい。此點に就き特に自ら缺けて居ることを認むる青年說敎者は、文法書を研究するのみならず、作文の事を論ずる良書を熟讀し、務めて練習文を書かなければならぬ。之によりて別に得る所がなくとも、せめては人に笑はるゝ樣な誤りに陷る恐れを去るといふことは大なる利益ではなからうか。作文上の些細なる事に注意すると共に思想に重きを置かなければならぬ。之が爲めに練習として文章を作る時には何か實際的の目的と興味とを以て書く事を計らなければならぬ。かゝる練習をする時は、先づ其問題に徹底し、然る後力ある開展と明晰とを傷けざる限り、成たけ、急速に筆を走らせ、細末の訂正は後に讓るがよい。されど此訂正を忘れてはならぬ。思想を一度一定の模型に鑄造するや、直に固定せんとするものであるから、多くの變更を加ふるは甚だ六ケ敷ことゝなる。時には全節を頭腦の鎔鑛爐に再び投じ一行中の一瑕瑾を取去らんが爲めに再び熱を加へなければならぬ事もある。ジョン・フォスターは一行を訂正せんとして二時間苦心したと云ふ事である。ヴアルジルはジオルヂックスを書くに當り時々一日に一行の割合を以て進んだ。彼は數節を筆記せしめ之を省略し校正し改作せんが爲めに一日を費したと云ふ事である。彼は文章の彫琢を計るを以て牝熊が其子を嘗めて形を作るに比して居る。テニソンは一詩(Come into the Garden, Maud.)を書き己が心に適するものとなすまで殆んど五十回書き直し之が爲に殆んど一ケ月を費した。彼は又二日間に一詩(Locksley Hall)を作り、後之を訂正精練するに六週間を費した。マコーレーやジョルヂ・エリオットは著述を書

き直し又訂正するに極めて周到なる注意を施した人々であつた。古今文學の大家中其著作を改作し又訂正する爲めに、數時間、時には數日を費したと云ふ例は決して稀ではない。

他國語を自國語に飜譯するは國語の使用並に體裁の上達に最も有益なる方法である。此事は妙に國語の知識を試驗し又之を發達せしむるに適して居る。我等が自己の思想を表現せんとするに當りては、最初朦朧、交錯、渾沌たる形態に於て此思想を有するに過ぎないが、正確なる言葉を發見せんと急るに當り、不知不識の間に其思想を變更し適當なる言葉を以て全く異りたる思想を現はすに至る事があるが、飜譯に於ては、單に初學者の如く一字一句を直譯するに非ずして、一文章(センテンス)の內に含まれたる正確なる思想を捕へ、之を自國語に當嵌めて正確なる言葉を發見するに於ては、思想が交錯したり、變更したりする樣な虞はない。思想は其國に特有なる色彩を有し、定つて動かぬものであるから、之を表はす爲めに適當なる言葉を發見しなければならぬ。然らざれば我等の目的は無効に歸するのである。だから或點から云へば飜譯に意を用ゐることは創作的の作文も及ばぬ練習を我等に與へるものである。右に比ぶることは出來ないが、是と殆んど等しき利益を與ふるものは確かに通譯である。ウイリアム・ピットの父はピットをしてグリシヤ其他の國語を即座に通譯せしめ、之を鋭意訓練したるが故に、ピットが、それより莫大な利益を受けたと自認して居ることはよく人の知る所である。文章を綴るのみならず、演說の體裁を磨かんが爲めに勉めて演說を試みなければならぬ。兩方に上達せる人はよく文章で演說風を眞似る事が出來やうが、もと〳〵此二つは實際別種なもので、或る點から云ふならば、全く異るものである。必ずしも書くには

及ばないが、注意して準備したものを度々話すがよい、又親睦會等に於けるが如く時々即座の感じに任せて話すがよい。常に實際的の目的を眼中に置き、辯說をなさんが爲めでなく、一定の目的に之を爲すことを努むべきである。又聽衆を綿密に觀察し、彼等は果して何程位了解し、どれ程位感動を受けて居るかを識別することを學ばなければならぬ。かくて緩慢に亘るべきか又は急速に走るべきかを悟るに至らば、直截に語る力と、一定の要點に向つて斷へず進行する心と、熱誠なる精力と、自然的の雅致と、伸縮自在にして變化を有するなどの演述體の特徵を獲得するに至らん。草稿を持たないで演說する事に上達せんと欲する人は日常の談話に於ける體裁に特別なる注意を拂ひ、日常の體裁と更に高調したる體裁との差は其種類に於てのみなる樣せねばならぬ。

著者、辯說者は變化ある體裁を養はなければならぬ。此點に關する適例はジェイ・アディソン・アレキサンダーの通信文及び其說敎に於て見る事が出來る。體裁に關しては表現の力を得る事のみを單に勉めなければならぬと思ひ、思想に少しの注意をも拂ふに及ばぬと思ふてはならぬ。或青年は此缺點に陷つて居るが是救ふ可からざるの禍である。クインテリアンは云ふた「言葉に就ては注意をなし、事柄に就ては熟慮しなければならぬ」と。

第二章

體裁の要素——明白

修辭學、說教學を論ずる人々は體裁の要素を樣々に分類し、又之に種々の名稱を與へた。文法上の要素と修辭學上の要素とを區別する方が便利であらう。前者は主として言語の正確並に純粹に關し、後者は殊に辯說に於けると著書に於けるとに拘はらず、そが與ふる所の感動又は結果に係るものである。此修辭學的要素に就き最良の分類法はカムブベル以來ホエートリー其他の人々に採用されたもの、即ち明白、勢力、優美とする事であらう。我等は之より說教に大切なる關係を有する體裁の修辭學的要素を研究せんとするが故に暫くカムブベルの分類に從つて論究しやう。

體裁の要素中最も大切なるものは明白と云ふ事である。秀逸なる體裁は尙大氣の透明なるが如く、思想を現はして自らを隱す如きものである。否この比較も、亦之より取りたる「明白」と云ふ言葉も不充分である。如何となれば良き體裁は幻燈のレンズの如く、自ら透明なるのみか尙其映寫に美はしき形態を與へるのである。

深遠らしく、然も曖昧なものを却て喜ぶ聽衆や讀者もある。其人々は思ふ、これ博識なり、大に獨創的なり、極めて深遠なるものなりと。是れ決して稀有の誤ではない。クインテリアンは尙氏の時代に於ても敢て之は新らしいことでないと云ふて居る。即ち氏は古書リヴイに或敎師が學生等に幽暗にすべしと常に敎へたとの記事を發見したと云つて居る。又聽衆が呟きて我等は足下の言ふ所を了解する事が出來ぬと云ふた時に其人は「それ程結構、余自身も了解しては居らぬ」と頓

智で答へたことや、又自分等の云ふ事は才能ある人々でなければ了解する事が出來ないのだから、自分等は才能ある者であると思ふ人々もあるなどと書いてある。

エム、ハックは喇嘛教寺院に於て學生等が教師の講義を聞く時其云ふ所曖昧で了解に苦しむもの程高尚なものであると考へて居ると云つてゐる。福音說教者の內にも此悲むべき誘惑にかゝる者があるが殘念な事である。

說教者は何人よりも用語を明白にすべき重大な責任を有つて居る。法律の用語や遺產書や又は、醫者の處方箋などは明瞭な言葉で書くのが極大切だとすれば、神の言葉即ち限りなき生命の言葉を宣傳するに之は更に一層大切ではなからうか。世俗の辯士にとりてよりも說教者に取りては聽衆全體に透徹する樣に話すは一層六ヶ敷い。其故如何にと云ふに說教者程雜多なる聽衆を有するものはない。見よ說教の聽聞者の內には老幼男女を問はず知識修養の程度の異なる樣々なる人々があるではないか。われらは此困難を深く認むると共に之が爲めに大に奮發すべきではないか。我等が說教をするは人々に利益を與へんとの希望の外何であるか。人が了解しないで如何なる利益を受る事が出來やうか。外觀美にしてしかも曖昧なるものは或は愚かなる人々の稱讃を博するかも知れぬ。無意味なる美が一種の快感を與へるかも知れぬ。併しながら眞正の利益を與ふる者は只眞理のみ、しかも之が了解された時のみである。さもなくば單に利益を與へる事が出來ぬと云ふばかりでなく、之よりも重大なる事が起るかも知れぬ。即ち害を與へるかもしれぬ。或聽衆は曖昧なる話に對し反抗心を起し不平を訴へるかも知れぬ。又或者は誤りに陷るかも知れぬ。

我等が藥と思つて與へたものを毒にすると等しく、人々の我等を誤解するは稀ならぬこと、又是程悲しいことはなからう。人の魂を愛する我等は斯る恐ろしき結果を避けんが爲めに勉めなければならぬ。クインテリアンが既に云へるが如く演說の不明な所は自分の智的光明を加へて之を了解するなどと云ふ熱心を聽衆が有てゐるものと思つてはならぬ。人々が物體を注視して居らなくとも、太陽の光線が眼を刺激するや、直ちに其物體を明ならしむるが如く、我等の話が聽衆に明かなる樣に話さなければならぬ。我等は聽衆が了解する樣に注意するばかりか尙又了解せぬ事は彼に取りて全然不可能であると云ふ樣に話さなければならぬ。獨逸哲學者フイヒテは左の如き題の論文を書いた事がある。「我哲學の本領、日を見るが如く明瞭なる事柄、讀者を して了解するに至らしむる構案」これ深く信ずる所の人でなければかかる題目を揭げる事はなからうが、之は苟しくも人の師たらんとする者は、橫柄ならず、しかも斷乎として、讀者若しくは聽衆をして了解せしむる事を眼目とすべきものなるを示して居る。

明白に關して一般的に亘る二個のことを擧げやう。體裁は全く明白であつても、其問題が六ヶ敷い爲め、又は其內の敎訓を首肯することが出來ぬが爲め理會し難く見ゆることがあらう。例へば羅馬書は不明瞭であると、人々は云ふが、つまり此書に實際敎示されてある問題以外の事柄をも此書に依りて了解せんとする希望あると、又此書に敎ふる所を眞理として承認するを躊躇するが故に右の如く云ふのではなからうか。辯說に依りて此書翰の眞理をます〳〵明瞭にせんとするに當り、若し我等が此書本來の意義と全く異りたる意義を之に付與せんとするならば、ます〳〵不明瞭に陷るは當然である。次に體裁の明

白は思想の明白に密接なる連絡を有する事である。ホエートレーが云つた通り、說教者が屢々陷る弊風は自分には解り切つた問題でも、之が外の人にはよく知られて居らぬと云ふ事を忘れ、至つて不明瞭に話す事である。一つの問題について明晰なる觀念を有すれば必ず明晰なる叙述をなすに至るものであるとの主張は、以上の事實により成立たぬを示して居る。明晰なる觀念を叙述するに當り之が主觀的に明晰であつても必ずしも客觀的にも明晰だと云ふ事は出來ぬ。即ち自分には明晰であつても他人には至つて不明晰であるかも知れぬ。併しこれは明晰なる思考なくして發表の明白を得る事は出來ぬと云ふ命題とは全く別物だ。明晰なる概念を把む事と、又之に對して透明徹底的の言葉を發見する事は通例相並行するものであつて、又明白に發表する習慣が思想の上に反照する力は偉大なるものである。時としては三位一體、化身、罪などの教理の如く充分に理會する事は出來なくて唯感得する事のみ出來る事柄について話さなければならぬ事がある。時には又少數の人々には明瞭に了解せしむる事が出來るが、多數の聽衆に之を明瞭に理會せしむる事が出來まいと思ふ樣な事柄をも論じなければならぬ。しかしかゝる場合に於ては其問題と事情が許す限り明瞭にすることを勉めなければならぬ。

體裁の明白は主に左の三つのものに基づいて居る。即ち、**命辭の選擇、句節の構成、並に精粗よろしきを得る事。**

(一)明白が如何に使用する所の用語に依ると云ふ事に關しては二つの要素を結合しなければならぬ。

(イ)出來るだけ聽衆に解り易き言葉や語句を使はなければならぬ。聽衆が比較的に無教育なる人々の多數より成立つ時には(之は通例の

事であるが)言葉を解り易く語る爲努力しなければならぬ。或常識を有せる百姓が說教者たる自分の弟に「女子供に迄も分る樣に、又男子は確かに了解する樣に話すべし」と云ふたと云ふことである。デイン、スウイフトは青年牧師に與へたる有名なる手紙の內に此の事に就て次の樣に云ふて居る。「余は新に說教者となつた人の說教中恐く聽衆の百分の一人も了解する事の出來ない樣な澤山な六ヶ敷言葉を聞き好奇心に駈られて之を表に作つたことがある。此事に關し多數の牧師等は我と共に同意見を有するにも拘はらず、我知れる牧師中此弊に陷らざる人は殆んど思當らない」。

說教者たるものは語學者たると否とに拘はらず、少くとも二個の言語即ち書籍の言葉と日常生活の言葉とを知らなければならぬ。ウエスレーは云ふた、說教者は考を學者と共にし、話は普通の人々と共にしなければならぬと。拉典語又は獨逸語にて學びたることを人々に傳へんとする人は無論飜譯をしなければならぬと等しく、說教者は六ヶ敷い書籍を研究し、其內に當然使はれてある科學上の術語を普通の言語即ち日常生活の言葉に飜譯して說教に用ゐなければならぬ。大學又は神學校より新に卒業し來る多數の人々は此點に就て誤謬に陷り、自分はよく知つて居るだらうが、單に普通の人々に解り兼るのみか、一般の人々が少しも了解しない樣な數多の言葉を使用するのである。大抵の人々は後年に及び此事を知り幾分か此弊を矯正するに至るが年齡に長じたる有力なる人々の內にも猶普通の思想表現法に全く未熟であつて自ら之を認めて居らぬ人も時々見える。その說教を了解し彼に同情を表する少數の人々は彼を稱讃するが、多數の人々に取りては外國語にて話されたのと違ひはない。人々がよく知つて居る神

學上の術語であるからと云つても必ずしも人々に明瞭なる觀念を與へるものではない。併し新生、墮落などの如き語は說敎に用ふる必要がある。もし遠廻しに之を說明する時には多く時を徒費しなければならぬ。されば是等の言葉を明瞭に說明するか、又は普通なる言葉を其前か後かに加へ、又は前後の連絡によつて了解せしむる樣に話すべきである。聖書には極く普通な言葉であつても、之を全く非聖書の意義に用ふる事が出來ると云ふ事は近世汎神論を主張する不信者等の屢々使用するによりて知らるゝのである。

(ロ)我等は我等の思想を正確に發表する言語、語句を用ゐなければならぬ。言葉は聽衆に了解されても其意味は確實に彼等に徹底して居らないかも知れぬ。もし言葉が不明瞭で聞く人が其言葉の意義を二樣に了解する事が出來る場合に、其人はそれが何れの意義に使はれたのであるか容易に之を判別する事が出來まい。或は同じ連絡の內に同一の言葉が全く異りたる意義に使はれて、言葉其ものは不明瞭でなくとも、其意味が疑はしき場合もあらう。或は概括的の言葉であつて如何なる特種の觀念を現はすのであるかを知る事が出來ない場合もあらう。或は又漠然とした言葉であつて如何程の範圍の意味を以て使はれたのか分らない場合もあらう。概言すれば言葉は正確で、其意義に全く當嵌つたものでなければならぬ。即ち言葉と觀念とが正確に一致し、一方のものが他方に含まれて居らぬと云ふ樣な事のないものでなければならぬ。此習慣を養ふ事は他人を利するのみならず、吾等自らの心意にも大に益あるものである。故如何と云ふに適當なる言葉を發見するに比例して吾等の思想に一定の形式を與へ明確なる輪廓を與ふるものである。是は又斬新の感を與へる。異なつた問題

に就いて自分の考其まゝを發表する人々は幾分か獨創的たることを得るのである。

正確に達する一の大切なる方法は類語を正確に區別する事である。デクインシーが云へるが如く、國語は進むに從つて、其類語間の區別はます〳〵明かになるものである。

言語選擇に上達する事は容易の業ではない。此點に成功した人々は天賦の才の有無に拘はらず、觀察と反省と、練習とによりて達したのである。言葉は大切なものでないと思ふ人は到底思想の明晰も又之が發表の明白をも得る事が出來るものでない。

(二)明白の如何は又句節の組立によるものである。此大切なる問題に關しては玆に詳論はしない。何故と云ふに之を爲さんとせば數多の實例を示し、又練習を授けなければ充分に了得さする事が出來ぬからである。簡短なる文章は長き文章よりも明白に富んで居る。併し極く短い文章を連續的に並べる時は釣合を缺き、漸層に屬する勢力を殺ぐばかりでなく明白を傷づくるものである。文章は人々が之を了得し、又之を記憶すべき樣に思想を一括するものであるから、其容量が過大ならざれば隨つて思想の全體を捕へ易く又之を記憶し易きものである。簡短なる文章と長い文章とを結合して變化を計らなければならぬ。長い文章でも語るに隨つて其意義が了解せらるるが如きものならば明白を害はぬ。併しながら終結に達せざれば其意義を了解することの出來ぬ樣な長い文章は人々の精神上の努力を要することの大にして、之によりて損する所は得る所よりも反つて多いのである。「文章の組立に關しては、單純を目的とし、長くして込み入つた複雜なるものを避けよ。多數の人は讀書に馴れて居るが、長い文章で其終結に

達せざれば全體の意義を了解する事が出來ぬと云ふ樣なものに逢ふ時には、前後の關係を失ひ、言葉の組立を明にせざるが故に、大に當惑を感ずるものであると云ふことを常に記憶せよ。されば言葉遣が日常の談話體に近づくに隨ひ人々に了解せらるゝのである」。語句の組立は成可く明瞭にして一點の曖昧を挾まざる樣にしなければならぬ。殊に其、此、彼などの代名詞を使用するに當りては注意を怠つてはならぬ。

文章を都合よく組立てるは實際困難であるが、又實に大切なことであると認めぬ人はなからう。しかし段落を設けることは左程大切なものだと感じない不馴な著者や辯士も少くない。「文(センテンス)」を聚めて段落となすは近世散文の眞技術である(アール氏英散文四七三)。可なりの力量を有する人であつても論文を草するに當り節を更に設けない人もある。如何に不注意に書かれたるものなりとは云へ、其の思想に何等かの自然的連絡を有して居るものであるから、批評家が之を見るならば全體を數個に分離する事は出來ない事はなからう。甚しきに至つては手當り次第に節を設け、連絡して居る事柄をも分離する事がある。併しある點より云はゞ節を適當に作るは文章を作るよりも更に大切な事である。若し文章の排列よろしきを得ざる場合ありとも、聞くもの又は讀む人はどうせ其事物に接して居るのであるから、又思想の如何なる關係を發表せんとするのであるかは多少の努力によりて大抵了解することが出來るが、節を設ける事を怠るに於ては此缺點を補はんとすれば辯說の全體に亘りて注意を施さなければならぬ。讀書に當つては既に讀みたる部分を顧みて全體を精査し、思想の順序を知ることも出來るが、聞くに當りてはかゝる助も亦其連絡を精査する時間もない。されば聞かるべき辯說に於ては殊に適當なる節を設ること

が、それを明白ならしむるに缺ぐべからざる事である。

節に最も必要なるものは統一である。ゲナングは「節とは文章の連絡せるものにして、一項目の展開を構成するものなり」と定義を下して居る。故に全部に亘り、何等かの一個の思想、又は相關係せる一群の思想がなければならぬ。若し話の横道に入る樣な事があつたならば、之が爲めに別に節を設けなければならぬ。一貫せる思想は普通第一行中に發表するか、又は連續したる諸思想中の第一のものを先にし、其中に是等の諸思想に共通なる目標と思想とを表はす樣にするがよい。しかし時としては始めの辭句は全く準備的のもので、前節の思想を受け、其續きを之で明示する事もある。も一つ必要な事は羅列する辭句が互に相連絡發展して全節をなすが如くすることである。節の長さに就ては勿論別に規則はない。只大切な事は平易で自然的なる變化を計るべきである。

即席の說話もつまり同じ事ではあるが、此場合には節よりも寧ろ要點に注目した方がよい。紙面に如何に之を排列すべきかと云ふ事を考へるのでなく、說話の要點を順序正しく排列する事を計り、然る後一歩一歩順を追ふて述べ、要點より離れない樣にしなければならぬ。かくせば統一と連絡とを得る事が出來る。辭說者にとりて作文の練習は大に必要であるが、一個の思想を展開するに當り連絡を計る事を學ぶ爲めに特に之が必要である。文を作らぬ人でも、時としては文章をなすに妙を得、又辯說を排列するに長じて居る人もあらう。かゝる人は明瞭なる要點を摘み又其各要點の統一を構成するに妙を得て居るのである。しかし是等の要點を順序よく發展し、各文章が漸々進歩して連絡を保ち、かくて出來上りたる所の統一體を一個の構造となし、一

個の調和せる所の組織體となすと云ふ事は、筆を取りて段落を作る事を練習せずして之に達する人は少い。さればとて之は急いで說敎を書き之を朗讀する人々に極く有勝なことであるが、倉皇筆を走らして文を作るのでは役に立たぬ。否、時には早く書くこともよいが、倉卒に筆を取らず意を用ゐて之を爲し、訂正を怠らず、又之に必要なる練習をも積まなければならぬ。草稿を用ゐずして說敎する人々は、必ずしも其話さんとする事柄に就てゞはなくとも、傳なり充分の注意を施して文を綴る事を勉めなければならぬ。

(三)明白の如何は言葉の選擇、文章及び節の構成がよろしきを得ると否とによるのみならず、又體裁の簡潔なると冗長なるとによるものである。一觀念を最も簡單に叙述せるものは最も明白なるものであると思ふのは間違である。もし其事が聞くものに眞に明瞭であるならば勿論短い程よろしい。しかし『簡略過ぎるものは、智力と修養の至つて低き聽衆又は讀者には不適當なるものである。……解剖學者は云ふ食物に缺くべからざる要素は營養分を有するのみならず、更に胃を擴張して其働きを充分ならしむるものであると。故に馬には穀物のみならず必要丈の分量を供給する爲めに藁又は乾草を與へなければならないのである。丁度之に似た事が普通の人々の頭腦に對しても必要である。即ち彼等は見聞する所の事が如何に明晰であつても、若し其分量が少なくあつたならば、之を充分に消化し又同化する事は出來ない。……則ち其問題について暫時の間注意を繼續せしめる事が必要である。哲學的頭腦を有たぬ人は讀んだり聞いたりする事に當座の注意を與へる事が出來ても、己が腦中にて後に之を考へると云ふ事は出來ない』。

斯の如き頭腦を有する人々に對して冗長の體裁を用ゐて話すとも成功は到底六ヶ敷い。あまり長々しく、くど〳〵しく說かば、簡短に語つて其意味を了解する人々も、亦其意義を理解する事の出來ぬ人々も、共に當惑を感じ、其言葉に對して不斷の注意を保つ事が出來ないで、話が終らぬ內に旣に聞いた部分を忘るゝものである。加之あまりくど〳〵しき時には注意力は減じてくる。不完全なる注意を以て聞いたのは其言葉が如何に明白であつても通例充分に了解されては居らぬ。されば說敎するものは、苟も人々がそれに專心注意を施さばどうしても了解せざる譯には行くまいと云ふ風に、己が意義を發表するのみに滿足せず、人々は之に對して如何なる注意を傾くるであらうかと云ふ事を考へなければならぬ。一方に於ては思索力のない聽衆に向て多くの事物を發表するに僅かに數言を費すに過ぎず、又他方に於ては人を倦ませる樣な冗長を以て語るとせば如何で願ふ所の注意を引くことが出來やう。

冗長は簡短に失するよりも一層惡い。簡短に失する時は充分に解されぬと云ふ恐があるかも知れぬが、注意と反省とを促すものであるから、隨つて此問題について研究の心を起すものであるが、冗長は人をして倦ましめ又飽かしむるに過ぎぬ。自分の心意が創作的でない時でも說敎者は說敎をしたり又之を準備したりする事があるが、かゝる時に當りても何事かを話すべき義務を持つて居る。又如何に思想が欠乏して居るとも、又如何に自分の氣が進まぬとも、習慣上數十分の間語らねばならぬ。かくの如き場合に當り人の思想は明白ではない。然るに之を言ひ表はさんと勉むるが故に冗長に流るゝは又已むを得ざる事である。

冗長に流るゝより逃れ、又簡短に失することを避くべき方法は種々ある。其一は反覆することである、或場合に於ては同じ言葉を用ゐて叙事を反覆するがよい。最も普通なるものは同一の考並に論法を色々異りたる言葉遣ひを以て反覆し、其意味が充分に徹底するまで人々の心を其事に引きつける事である。此反覆は單に重複であつてはならぬ。即ち何か異りたる見解若しくは新らしき關係によつて其思想を表はさなければならぬ。「一度適當なる言葉を以て言ひ表はしたる事は更に比喩的の言葉を以て反覆するもよし、或は議論の順序若しくば對句の順序を轉倒するもよし、或は既に解釋し來りたる數個の要點を更に異りたる順序に配列するもよい」。其次の方法は別の例を用ゐる事である。適當なる範圍内に於て、出來るだけ明白に思想を述べた後、諸方面に亘り樣々なる例を上げてもよい。是は聽衆に興味を與へ、其問題について彼等の注意を引き、聽衆を倦ましめずして其問題に精通するに至らしむるのである。此好模範的人物はチャーマースである。氏の說敎は單一なる觀念から成立つて居るのであるが、彼は之を樣々の方面より論じ、之を上下左右に回轉し、其各方面を人に示すのみならず、尙其各方面は何れも想像に富み、光彩燦爛として吾人をして少しも飽かしむることのなき程美はしき例に滿ちて居る。此點につき又其他の點についても、チャルマースは摸倣の手本として最も劣れるものなるにも拘はらず、又研究の對象としては最も利益を與ふるものゝ一である。冗長に流れずして適當な長さに達する第三の方法は區分である。如何程細微なる事柄であつても、猶ほ更に之を數點に區分する事が出來やう。是等の諸點を其順序に隨つて述べる時全體は明らかに見えるであらう。

茲に注意を喚起すべき事實がある。之は說教者が大に考へなければならない事である、即ち他の點に就ても、又殊更に意義を擴張すると云ふ事に關しても、公開演說の體裁は論文、又は注意を以て人々に讀まるゝ爲めに物せし文章の體裁とは大に違つて居ると云ふ事である。デクインシイは此の事を次の樣な言葉を以て述べて居る。

「文章に取りて惡しき修辭學も辯說に取りてはよきものがある。辯說に適用すべき體裁の規則は普通の文章に應用する規則とは甚だ趣きを異にして居る。議場に於ては、(新聞紙に於ても同じ事であるが)意味を反覆すること……實際同一の意義のことを言葉を變更して云ふこと、又は眞理を稀薄にすることなどは度々必要である。(中略)書籍は若し必要ありとせば數葉前に遡りて調ふると云ふ利益があるが、辯說の場合に於ては之は出來ない。各句は生るゝと共に死するのであるから、話すものも聞くものも更に緩慢なる體裁を喜ぶのである。されば重味のある命題を、趣味の上からも、又論理の上からも、書籍に於けるよりも更に長時の間目前に留め置くと云ふ事は話すものゝ爲め又聞くものゝ爲めに有益である」。

アリストートルも又明瞭に同じことを公言して居る……

「彼等を比較して見るならば、著者等の演說は討論的に述べられたものであつても含蓄的で收縮して居る樣に見えるが、雄辯家等の辯說は話す時には極めて成功したものであつても後で之を讀む時は至つて平凡なものである。此譯は討論に於てかゝる平凡なるものは反つて適當であるからである。故に演說すべき必要のない時に準備した說は何等の功果をも奏するものでなく、反つて滑稽に見ゆ。かく文章に於ては接續詞を省略する事や、又は度々之を反覆する事は禁物である

が、討論の場合に於ては之を爲てもよろしい。何故と云ふにこれ雄辯術に適つてゐるからである。併しながら同一のものを反覆するに當りては其發表法を變更すると云ふことが必要である。例へば『彼は汝のものを盜めるものである。彼は汝を欺けるものである。彼は遂に汝を付さんと計つたものである』と云ふが如きである」。

終りに明白を得んと勉めて之に失ふ事があると云ふ事を記憶しなければならぬ。既にわかつてゐるものを更に詳しく說明したり、又反覆したり、又は分解したり、例證したりする人に耳を欹てる事は極めて倦怠を催す事である。又辯說上言葉を多くすると云ふことは(我等が屢々陷るが如く)不必要なる言葉を濫發すると云ふ事とは全く異つてゐる。

第三章

體裁の勢力

勢力と云ふ語を體裁の事に當嵌むる時は、活氣、力、熱情などの語によりて表さるゝものを總括して云ふのである。活氣あれば人の注意を喚起するものである。聽衆が骨折らなければ了解に苦しむ樣な事を云ふのでは足らぬ。要ば聽衆を覺醒し彼に熱を與へ容易く且愉快に注意せしめ、否注意せざるを得ざらしむる事である。之が爲には思想の清新と巧妙なる演述法とを執らなければならぬが、活氣ある體裁も亦大に之を成就する事が出來やう。力と云ふ語は重に議論に關係して使はれるのである。熱情(更に平穩なるものは溫情と云ひ又其高尙なるものは崇高と云ふ)は想像の助によりて其影響を感情の上に及ぼ

し、力と熱情とは結局意志を動かすを目的とするのである。吾等は雄辯とは如何なるものであるかを已に考究した(序論第二節)。既に論じたるが如く雄辯的体裁の特徴は勢力である。雄辯的體裁を得んと欲すれば哲學的體裁並に講義的體裁に於けるが如く明白で、又美文的體裁と等しく優美でなければならぬが、其の主要なる特徴は勢力即ち活氣、力、並に熱情である。

勢力ある體裁に主に必要なものは熱烈なる性質である。即ち勇健なる思考力、熱烈とまでは行かなくとも熱心なる感情、一定の目的を達せずんば止まざる覺悟などを持たなければならぬ。若し是等のものを缺かば眞且つ高尚なる勢力を体裁に顯はすことは出來るものではない。此意味に於て雄辯家は生れながらのものであつて造られるものでないと云ふ事が實に眞である。此種の要素を具備せざるも價値ある教を人に與へ、又之れなくも盲賞者等が立派な說教であると稱ふる所の說教をすることが出來るかも知れぬが、若し說教者にして品格の力又熱情的精神を有せずんば到底雄辯たることは出來ぬ。小膽にして神經質なる人々の内にも尙練習によりて確信を得、又其力を發揮す可き機會に遭遇せし塲合には、是迄自分が思つて居たよりも更に偉大なる能力を發揮することがある。フェルプスは云ふて居る「感情より發する此勢力程、力あるものはなく、又他に之に代るべきものもない。勢力と熱血とは品格と共に並び存するものであつて、又此等のものは体裁に於ても並存しなければならぬ」と蓋し至言である。又彼は他の處に於て眞正なる勢力は其基礎を沈着の上に置くものであると云ふて居るが明言と云はねばならぬ。突飛と激烈とは反て眞正なる目的を達することは出來ぬ。之を、强くして且つ自我の統一の下に自制を

失はざる勢力より來るものと比較すれば大に其趣を異にして居る。

次に必要なるものは話すべき事柄である。即ち極めて大切と思はるゝ何事かを持たなければならぬ。若し力ある發表をなさんと欲せば先づ頭中に思想が滿ちて居らなければならぬ。自分で此事は眞理であると心から信じ、大切のことゝ強く感じ、又之を他人に深く感せしめんと熱心に求むる所のものでなければならぬ。說教者が常に聖書と親み深く之に通ずるに於ては、之が勢力供給の好財源となり他人の企て及ばざる一種特別なる利益を占ることが出來る。一時的の如何なる感興と雖も永遠の感興に比することは出來ぬ。如何なる問題であつても吾等が熟知する處の眞理程吾人の精神に勇氣と權威とを與ふるものはないとは聖書の敎ふる所である。「眞に偉大なる說敎者は聖書に通達したる人である」(シュエッド)。

體裁の勢力は四ッの點より考へなければならぬ。即ち言語の選擇、文章(センテンス)の組立、簡潔及び比喩の使用である。

(一)語の選擇に就て注意すべき一の事は其問題の許す範圍內に於て抽象的の語よりも具體的のもの、概括的の語よりも特種のものを採ることである。哲學的辯論に於て、又は綿密なる叙述に於ては、勿論抽象的や概括的の語が必要であるが、是等は體裁の勢力の爲には甚だ不利益である。「語が概括的なるに從つて其描寫は益々漠然となり、特種なるに從つて益々明瞭となる。特種的の語を用ゐた時は全く同一の思想を概括的の語を用ゐて、それと同樣に正確に顯はし、或は之によりて反つてそれよりも明瞭に顯はす事も出來やうが、併し此場合に於て其色彩は朦朧たる可きが故に想像に同一の快感を與へる事が出來ぬ。且つ之が爲に注意を引く事も又は記憶を深くする事も出來るもので

はない」。カムブベルは聖書の適例を擧げて此事を證して居る。

「ソロモンの歌に於てイスラエル人が紅海を渡れる奇蹟を叙するに當り、靈感を受けたる詩人は埃及人の事を『彼等は猛烈き水に鉛の如く沈めり』と云ふてあるが、それを少し更へて『彼等は猛烈き水に金屬の如く落ちたり』と云はゝ其結果は如何に驚く可き差異を生ず可きか。併し其思想に於ては全く同一である。何れに於ても著者の意義を誤解する事は出來ぬ」。此の差異は全く特種の語を概括的のものに變更するより生ずるのである。『野の百合花は如何にして長かを思へ勞めず紡かざるなり、われ爾曹に告げんソロモンの榮華の極の時だにも其の裝この花の一に及ばざりき。神は今日野に在りて明日爐に投入らるゝ草をも斯くよそはせ給へば況て爾曹をや』、之れに少しく變化を施し特種の語の代りに更に概括的な語を使用し、之れによりて如何なる變化が生ずるかを見よ。『花は如何にして其形體を漸然增加するかを思へ。彼等は何等の働きもせず、されど吾爾曹に告げん、如何なる王者の美服と雖ども是等の花に優れる裝にあらざりき。神は其攝理に依りて地上に於て暫の間生存し間もなく火に投ぜらるゝ植物をも斯く飾り給へばなどて爾曹に着物を與へ給はざらんや』。右の如く些少の變化に由りて同一の思想も如何に無趣味に發表し得るものなるかを見る事が出來やう」。

體裁に活氣と熱情とを與へんとせば想像に訴へざるを得ぬ。然るに吾等は一個々々の物に就てのみ心象を畫くものであるから、一種族に屬する或る個體の心象例へば百合の花の如きは其種族即ち單に花と云へるが如き物よりも更に容易く又更に明瞭に想像する事が出來るのである。

ホエートリーは指摘して居る、如何なる問題であつても概括的の語か特種的の語か何れかを用ゐて發表し得ぬと云ふものは殆んどない。若し其事を明言するを憚る時、又其事物が人を怒らせ或は厭味を與ふるが如き事を更に穩かに云はんとする場合、即ち餘り明確なる印象を與ふるを欲せざる場合には概括的の語を用ゐるがよい。例へば放蕩者の出入する場所を惡所と云ふが如き是である。多くの人々、殊に練習を積まざる著者は、特殊を使ふべきに概括を使ひ、特定の事物を指示す可きに其種族を語りて其體裁を柔弱ならしむるの弊に陷て居る。此等の人は世俗の人々が普通使はない所の語を使ふならば反て上品に又深遠に聞えると思て居る。又或る時には之により其應用の範圍を擴むるが故に己が議論を周到にし己が云ふ所の効果を增大にすると思て居る。斯く經驗なき說敎者等は「德と不德」又は「敬神と不信」などの如き特殊より遠く離れたる抽象的の問題を揭ぐるの弊に陷て居るが、實に彼等は多くを包容せんとして、殆んど何等の印象をも與へざるに至るを忘れて居る。

形容語は勢力を增す助けとなる事は殆どない。形容語は名詞に附したる形容詞、又は動詞に附したる副詞なるが故に、其名詞其動詞の意義に何等のものをも加ふるものではなく、唯其中に包含する何物かをあり〳〵と目立たしむるの用をなすに過ぎない。形容語は第三位に屬する小說家や文章家や辯說家に愛用せらるゝものであるが、之によりて發表の力を强くすると云ふ事は決して出來ぬ。形容語を裝飾的に使ふてよい場合は單に詩歌や美文の時のみに過ぎぬ。人若し林檎樹の一枝を友に贈り、彼を慰めんとせば、小枝や、葉、花などを其儘にして贈るであらう。併し若し此の枝を以て人を擊んとせば小枝や葉や花

などを取り去らなければなるまい。併し形容語は適當に之れを用ゆるならば矢張り力を增す事が出來やう。例へば之を附せざれば人々が注意を拂はざるが如き事物の或性質を、之によりて目前に現はす事が出來る場合。又之れによりて强き暗示を與へ議論を簡略ならしむることが出來やう。例へば「吾等は佛國の血腥き革命を戒めなければならぬ」と云はゞ、此形容語は戒む可き一個の理由を暗示するものである。此の如き方法によるは長々と論ずるよりも更に明瞭に更に有力に人の感情に訴へる事が出來る。されど青年著者又辯士、殊に想像力に富む人は、形容語を用ゐるに當り深く愼み寧ろ可成之を省かんが爲め自制せねばならぬ。

自然の響を模ぬる語(大砲がドンと鳴つたの如き)も時には勢力を加ふる事がある。けれども辯舌に於て之を使ふ時には故意に作つたものではならぬ。

普通に使用されざる言語や句などは又勢力を添へる事もある。是恰かも來客若しくは外國人などの如く、普通平凡のものと相反するが故に特別なる感興を惹起すものであるからである。されど若し來客が氣の知れない未知の人であるか、外國人か可笑な人であるならば、其結果はよくない。是と等しく普通ならざる語を用ゐる時は解し惡きものの又奇怪なるものではならぬ。

(二)勢力は文章(センテンス)の組立に依る事が多い。

文章の組立は動詞を最後に置くやうにするがよい。即ち名詞に始まり其名詞に附屬する句を之に續け次に動詞に附屬する句を列ね動詞を以て終るやうにするが宜しい。キャムブベルは好適例を與へて居る、「遂に吾等は雨天惡路を辿り、甚く疲れ、少からざる困難を嘗めて目

的の地に達しぬ」、之を次の如き疎漏なる配列と比較せよ。「吾等は遂に目的の地に達しぬ、少からざる困難を嘗め、甚く疲れ、雨天惡路を辿りて」此場合に於て其意義は完全して居るが此文章は其途中何處で終ても差支ない樣に出來て居る。

若し又更に之をよくせんと欲せば次の樣にするがよからう。「少からざる困難を嘗め、甚く疲れ、雨天惡路を辿り目的の地に達しぬ」。此の場合に於ては少からざる困難と甚く疲れたる事を先きにするを以て、此方に重きを置くが故に從つて其意味に於ても多少影響を及ぼすのである。文章は可成聽衆の注意を最後迄持續する樣に組立るのが肝要である。然らざれば聽衆の注意は消失するものである。

文章の意味に勢を附けるに二ッのやり方がある。一ッは其組立によるので他は語に力を入るゝのである。例へば「今日君は馬で街に行き給ふか」と云ふ文に於て「今日」、「君は」、「馬で」、などの如く其内のどの語かに力を入れる時は、其意義に變化を及ぼす事が出來やう。又之と同時に字句を轉倒して其語の位置によりて勢を示す事が出來やう。例へば「馬で今日君は街に行き給ふか」と云はゞ馬に力を入るゝ事になる。

文章に於て最も目につく位置は始めであつて其次は終である。故に普通の文法上の順序によれば中間に來る語を始めか終に置かば特別なる注意を惹起するものであつて、之が其文章の大切な强い語となるのである。通例語を配するに當り、普通の位置以外の處に之を置くときは、之が特別に人の目につくものである。斯く順序を轉倒し頭角を顯す樣な特別な場所に極大切な語句を置かば更に一層勢力ある文章を作る事が出來る。「大なるかなエペソ人のアルテミスよ」と「エペソ人のアルテミスは大なる哉」とを比較し、又ペテロの言「金銀は我になし

惟我に有るものを爾に予ふ」と、普通の文法上の順序から云ふた「我に金銀はなし云々」とを比較せば其強弱自ら明であらう。又「主よ〳〵と云ふもの悉く天國に入るにあらず」。「今は慈惠の時なり」なども其一例である。

時には強い語句を第一に置き、後代名詞で之を受けるもある。「ながらう可きか、ながらう可からざるか。之ぞ思案の種なる」の如きである。もし文章の始めに強い語を置く事が出來ないときには代名詞の役をなす句を以て始めるがよいこともある。「者は」などの語が順序を轉倒するに甚だ便宜な事もある。例へば「シセロがシーザーを稱讃した」と云ふ文章に二種の變化を施す事が出來やう。「シーザーを稱讃した者はシセロであつた」、「シセロが稱讃した者はシーザーであつた」の如きである。其他能動的の組立を所動的に變ずる事によりて巧に轉倒する事の出來るものもある。「更に之よりも忘恩の著しき例がある。彼が選び給へる十二使徒の一人はイエスキリストを否み又他の一人は彼を付した」。此文章に於て「イエスキリスト」は尤も強い語であるから、先きに來なければならぬ。之を爲すには所動的の組立にするがよい。「更に之よりも忘恩の著しき例がある。イエスキリストはその選み給へる十二使徒の一人に否まれ又他の一人に付され給ふた」と。

對句も亦大に勢を加へるものである。例へば「安息日は人の爲に設けられたるものにして、人は安息日の爲に設けられたる者に非ず」。「爾多端により思慮ひて心勞せり、然れど無くて叶ふまじき者は一なり」。「義者の名は讃られ惡者の名は腐る」。かゝる對句的の言語はソロモンの箴言や其他有ゆる國民の金言の內に屢見る所であつて、其簡潔にして力ある事は之が廣く行はれた原因である。クインテリアンが引用

せる「我は食ふ爲に生るに非ず、生る爲に食ふなり」の如き其力如何に强大なるものであるか。

斯る場合に於て相對する二個の句は相互相照して光を放つものなれば、簡短にして能く其意を盡して居るが故に、更に鋭利に更に力あるものとなるのみならず、之と同時に對照によりて全文が一層奇拔に聞えるのである。斯く對句は體裁の勢力と光彩とを增すものなれば數多の著者辯士等は之を過度に使用して居る。

マコーレーの文體は數多の點に於て實に稱讃す可きものであるが、此弊に陷り大に其價値を損して居る。說敎に於て特別に奇拔ならん事を屢勉むるやうに見えるは甚だ醜きものである。對句を過度に使用するは沒趣味に陷るのみならず、時々眞理をも犧牲に供するの弊に陷るのである。即ち二個の物を奇拔に對照せしめんが爲に知らず識らずの間に其差異點を過大にするやうになるのは極めて重大なる弊害にして、眞理を犧牲にしても勢力を得んとするは嘆ず可き事である。

强大なる感情に動されて語る人は時々破格の組立を使用する事がある。即ち全く語らんとする事に氣を奪れて居るが故に動詞の變化などに注意する事を忘れ、或は話を始めてから、途中で不意に外の事を思起して直に之に移り、當初に考へた事と全く異たる風に終るのである。最も熱した辯士、著者等は自然斯の如き言語を度々使用するに至る。使徒パウロの著書などに屢々之を見るのである。實際眞實の感情に動さるゝ場合に、破格の組立は恕すべきもので又力あるものであるが、始めから計畫して屢々之を用ゆるは、極く自然な時であつても決して許す可きものではない。

文章の組立と勢力を得んとせば練習の爲め文章を書更へるは少か

らざる利益を收むるの途である。斯くせば體裁の明白、優美の爲にもなり、勢力を養ふ爲にも極めて有効である。

(三)簡略によりて大に勢力を增す事が出來る。「言葉を少くする程(但し妥當と明白とを傷けざる範圍内に於て)其表現が必ず强力である」と云ふ事は一の除例外もなき公理と定めてよからう。

セキスピヤーは云ふた。『簡短は頓智の眞髓である』と。其思想の滑稽なると、重々しきと、活潑なると、崇高なるとに拘らず、簡單に發表する程、勢力は强く、其思想は活々として來る。(中略)是恰も太陽の光線を蟲眼鏡に透す時に、燒點が小さい程火氣の熾なるが如く、我等の思想を發表するに當りても、思想發表に要する言語の範圍が狹ければ狹き程其言葉に力がある。同一の思想も散漫に之を顯さば平凡に過ぎぬが、簡潔に之を顯さば鋭利なりとの稱讃を受けるにいたる(カムブベル)。

シーザーの名言は簡潔にして力ある語の好適例である。曰く「我は來た、見た、勝た」(Veni, vidi, vici.)。ラセデモニヤ人は簡潔な表現法を大に研究したと云ふ事であるが、今日でもラセデモニヤ風と云はゞ簡單と云ふ意を顯はして居る。アメリカ士人中の辯舌家等は、簡單、要領、直截の言を用ゐた。學者無學者に拘らず、何人も簡短を好む。簡略の反對は重複、贅言、多言である。重複とは同一の語を繰返したり又は異りたる語で之を反覆する事であつて、極く普通の缺點ではないかも知れぬ。贅言は何等の役にも立たぬ字句を使用することであつて極く有勝な弊にして、大に勢力を損ずるものである。多言とは之によりて多少の意義は加はるが、實際不必要な語を數多使用する事で、よくある事である。そして極く有害なものである。

多言を費して大言壯語する事は極く無學な人や生半可な教育を受

けた人の大に喜ぶ所であるが、是等の人々が褒めるからと云ふて、之が敢て其人々に實益を與へると云ふ譯でもなく、又辯士の實力を示すと云ふ譯でもない。「此種類の著者若しくは辯士に對して『言葉遣の名人じや』との評を聞くは稀ではない。併し寧ろ『言葉が彼を遣つて居る』と云ふ方が正しからう。斯かる人は思想の筋を辿るよりも寧ろ語路を辿るので、己が傳へんと思ふ事柄に就て明晰なる考を作り、然る後に之を發表せんが爲に適當なる用語を尋ぬるのではなく、唯其問題に關し己が胸中に浮び來る奇拔な言語を羅列するに過ぎぬ。辯士は尙騎手が荒馬を御するが如く己が言葉遣を制御す可きものである」。

希伯來の物語體は殊に散漫で迂遠である。希伯來詩歌の對句法には反覆が多い。聖書中に發見する以上の種類のものは欠點と云ふものよりも寧ろ著しき長所と云ふ可きである。併し今日吾等の辯說文章に對して近世の趣味が要求するものは右樣のものとは大に趣を異にする體裁のものである。是等の事物に關しては聽衆の趣味も參考しなければならぬ。

重複と贅言を矯めるには不必要なる語を取り去ればよい。之は大に注意して勉めなければならぬ。多言を矯めんとせば其文章を書き直して他の語を代用する事が屢必要である。

簡略を求めんとて明白を損してはならぬ。簡潔にして鋭利なる句は多くの人々に容易く了解されないかも知れぬ。斯る場合には準備として前以て稍委しき叙述をなし其後に之を用ゐるがよい。「委しい表現は人の了解に便にして、簡單なるものは人の記憶に利あり」。此種類の面白き實例はキリストの敎訓や雅各書の內に見えて居る。（太十九ノ卅、廿ノ十六、廿二ノ十四、廿三ノ十二、雅各一ノ十二、十七、廿七、二ノ十

三、廿六、三ノ十八、四ノ十七、五ノ六、)。或場合には簡單な叙述は言葉以上の思想を人々に與へるものである。何故と云ふに、頭腦は暗示に應じて自ら相聯絡せる思想を想ひ起し、想像は刺戟せられて其餘情を全ふするのである。餘り六ケ敷くなければ心意を働かせ想像力を活動するは誰にも實に愉快なことである。即其問題を捕へんと心が活動すれば、所動的に之を受るよりも、更に確實に獲ることが出來る。簡潔にして暗示的のものは體裁の最高の模範となすに足る。

青年辯士著者等の大多數は簡略を學ばんが爲に特別に注意しなければならぬ。自ら進んで文を綴り辯を練らんと思ふ人々は當然大抵流暢である。故に彼等に取りて滔々千萬言を費すは敢て困難な事ではなく、且思へらく、これ聽衆中の多數も亦喜ぶ所であると。豐富に失する體裁は瘠薄に過るものにまさる。併しシセロが云へる如く、春期穀物の繁茂し過ぎたるに於けるが如く、筆を以て薙ぎ倒さなければならぬが、之を能くするは少からぬ自制力を要する業である。少年が玉蜀黍を間引くに當り、三本の玉蜀黍が一株を爲してそれが皆長大であれば三本共之を殘したく思ふ。しかしその三本は二本程の收穫をも與へぬことを忘れてはならぬ。之に反して或人々は又己が體裁を更に豐かならしめんが爲に、文體の富饒を以て知らるゝ名著を熟讀し更に熱情を動かし或は感情を柔けて文を作り辯を練ることを勉めなければならぬ。

散漫は勢力の爲に利益ではないが、シセロ、バルロー、チャルマース、デクインシー、グラッドストーンなどに於けるが如く、横溢は極めて勢がある。前者は廣々と檢束なく散らすのであるが、後者は渦卷く流の如くに奔出するのである。ロンヂナスはデモセネスの熱烈なる體裁を

風雨、落雷に比し、シセロの體裁を大火の四方に擴り有ゆるものを嘗め盡さずんば止ざるが如きものに比して居る。明瞭を得んが爲に時々反覆することは必要であるが、說敎者の多數は之を薄弱無味殆んど聞かれない樣にするが、若し熱心なる人が、勢をつけ、速度を加へて語らば丸で別物となる。

(四)體裁の勢力を增す一要素は譬喩の使用である。熱情、忿怒、恐怖、熱愛、又崇高の情緒の發表は大膽なる想像によるは當然のことである。茲に大膽とは決して牽强附會の事をくど〳〵しく云ふのではない。

譬喩はまゝ體裁と云はんよりも寧ろ辯說の材料と思はれて居る。譬喩は單に思想を發表するのみでなく證明、說明の助ともなるが、通例譬喩は主として思想發表の手段として使はれて居るから、寧ろ體裁の一部分と見るが適當である。譬喩は通例體裁の美を增すもの、とりわけ比較などは明瞭を增すものである。併し殊に著しき助は勢力を加へると云ふ事である。今左に說敎の體裁に力を添へるに殊に肝腎のものに就てのみ簡單に講究するが、望むらくは諸子が更に完全な修辭學の好著に據り研究せられんことを。

隱喩は直喩よりも力がある。後者は明瞭を謀らんが爲めか又は美を憎んが爲に用ゐるのであるが、之は情熱あり勢强き辯論には避く可きである。デモセネスが「王冠に就て」爲せる大演說は全身の熱血を注だものであつたが、直截と勢力と熱誠とを以て語るに當り、直喩はたゞ一つしか使はなかつた。それも二語に過ぎなかつたと云はれて居る。併し直截は時として問題の性質上極めて有力である。

例へば「目は火焰の如く其聲は大水の響の如し」「そは電の東より出て西にまで閃くが如く人の子も來るべければなり」「あしき人はしからず

風のふきさる粃糠のごとし」の如きである。隱喩は相似點を示し、比較をなすに當り直喩に於けるが如く「……に似たり、……の如し」などの語を用ゐぬ。故に更に簡潔で强い。今雄辯家を指して彼は舞上る鷲の如しと云はゞこれ直喩である。然るに若し、彼が得意に語る時は舞上る鷲であつたと云はゞ隱喩である。隱喩が若し直に了解せられないやうな場合には、これを直喩と並用するか又は他の語を附加して解り易くすることが出來る。多數の隱喩はありふれたものとなつて何等特別の勢力を持なくなつた。併し未だ廢れないものや、新發明新結合の隱喩は無盡藏であるから、辯士は此寶庫を利用して勢力ある發表をなすことが出來る。想像力を以て之を產み出し、趣味によつて之が使用を按排するのである。不慣れな辯士は時々不釣合なものや笑ふべき程又厭味を催す程詳細に亘つた隱喩を用ゐる。併し是も其問題と機會と感情とによるもので、セキスピヤーが屢々非難さるゝ混喩も狂ふて自殺を思立て居るハムレットの獨語には不可ではなからう。

「困難の海に對して武裝す」

提喩も亦勢力に都合よきものである。物の一部分を以て全體を顯し、種族を以て類を顯す發表法は活氣と暗示に富むものである。既に研究した通り特稱名辭は全稱名辭よりも勢力に富んで居るのと同一である。「かれらはその劍をうちかへて鋤となしその鎗をうちかへて鎌となし」は單に武器を變へて農具となすと云ふよりも其勢果して如何。

誇張とは實際よりも誇大に云ふことであるが、これは或特別な事物又は問題に全力を注ぎて、其事の比較的に大切なる事を誇大にするか、又は熱心の餘り普通の言語にては弱過ぎると思つて語る人に極有勝

のことである。語を誇大にしても誤解せらるゝの憂がないとき、又大切な事實に關して印象を深く與へんとする場合には許す可きものである。「イエスの爲し事は此等の外になほ許多あり若しこれを一々しるしなば其書この世に載盡すこと能じと意ふなり」(約廿一〇廿五)。斯の如き言語は殊に熱氣ある東洋人の思想に有勝のことで、群衆を動かすに尠からざる力を有して居る。誇張又は其他の方法により或る言語を使用するは使徒保羅に於て著しい。彼が感情に滿ちたる言語「若わが兄弟わが骨肉の爲にならんには或はキリストより絶れ沈淪に至らんも亦わが願なり」(羅馬九〇三)は誇張的の語の一例と見ればよい。且つ彼は如何に愛國の念、敬虔の情、大膽なる勇氣に富んで居つたかと云ふことを心に留め、同情を以て讀まば此句の意義はよく玩味されやう。主の教訓などを見れば道理を敎ふるに極端なる場合を擧げて、一種犯すべからざる力を以て述べて居られる。例へば「人なんぢの右の頰を批ば亦ほかの頰をも轉らして之に向けよ」の如き。キリストは自ら頰を打たれ給ひし時外の頰を轉らし給ふたとは書てない。これは打返しするなと云ふ戒を極端に誇張的に述べたに過ぎぬ。これを「爾の右の手の爲ことを左の手に知らす勿れ」(太六〇三)、「我に來りて其父母……をも憎むものに非ざれば」(路十四〇廿六)の如き言語と比較せよ。人類の師表として、主は人々の眠れる心を醒し、彼等をして深く之を記憶に留しめ、且つ之を反省せざるを得ざらしめんが爲めに、樣々な手段を用ゐ給ふた。キリストの話給へる多くの語句を了解せんとすれば、此事を心にせずばむつかしい。且キリストの例に依て見れば、吾等がこの方法をとるに當ては奇矯に走る說教者と全く異りたる精神と語調によりてしなければならぬ。無生物を有生物の如く見做して話す

擬人法も亦時には大に辯論に活氣と美と、又情熱的勢力をも與ふるものである。これ等の例は聖書にも其他有ゆる詩歌辯說などに澤山ある。ソロモンの箴言中に智惠を擬人視したのは極く著しい。說敎中敎會を擬人視して餘り極端の點までこれを推すはよくないと思ふ。我等は凡てあまり想像に走ることは成る丈節約するがよからう。

頓旋とは辯說中眼を聽衆より轉じて或人又は事物に向つて語ることである。事物を指し之に差向つて語る場合は、これ同時に又擬人法である。「蓋預言者はエルサレムの外に殺るゝこと有ねばなり噫**エルサレムよエルサレムよ**預言者を殺し云々」(路十三〇卅三—卅四)。頓旋は本來熱情の語であるから餘り度々使たり長きに亘りてこれを用ゐてはならぬ。說敎者が目を上に注ぎて立ち或聖書の人物、世を去りし友、德などを擬人視したる者などに向て語るときには餘り長く述べることは出來ぬ。

感嘆は頓旋に近いこともあるが、もと〳〵異て居る。感情に走れる說敎者は稍これを使ひ過ぎる傾を有て居る。或人は「オヽ」、「噫」、「悲しむべし」などを餘り度々用ゐるが之が反て勢を削ぐのである。又他の人々は「偉大—」、「重大な問題」、「非常に」其他之に類する感嘆辭を餘り使過ぎる。されば之て我等は實際の感情によりて自然に發し來る感嘆辭を無理に抑る必要もない。

疑問法は辯士が辯論に活氣を與へる一種の方法として用ゐらる。實際上又は假想上の對手に向て疑問を發し、斯くして聽衆に活潑なる感興を喚起さすのみならず、又聽衆に對して絕えず疑問を發することもある。斯くて聽衆が恰も實際これに答へなければならぬと云ふ感情を起さしむるのである。けれども注意して之をなすにあらざれば

一個の發問者に過ぬと云ふ考を與へ、單調に失したる、極めて面白からぬ結果を生ずるのである。若斯る弊に陷る恐あることを氣付かば斷然之より離れなければならぬ。

演劇風は辯論に生命と元氣と愛嬌とを與へるに於て之に匹敵するものは殆んどない。或人物を假想し、此人物の思想を語り、此思想に反對する反對者を連れ來り、此兩人間の對話を一歩々々進めて問答せしめ、演劇的叙述をなして或光景を演ずるは有力なる辯士が多少使用する方法であるが、デモセネス、クリソストム、スパルジョンなどの辯說中斯る例は多い。講壇に於ては演劇風を使用する範圍を狹め、且常に趣味と眞面目なる感情とを以て之を取締らなければならぬ。殊に擧動、音調などを摸倣する時には深く注意を拂はねばならぬ。さもなくば滑稽に流るゝか、神聖なる辯論に不適當となるものである。

體裁の勢力に關し屢人々が陷る重大な弊害がある。或辯士は問題に不適當な場合、實際の感情と一致しない場合に於ても猶體裁並に動作に勢力がなければならぬと思て居る。先づ強き感情あるに非んば、熱烈な、且つ勢力ある言語を使つてはならぬ。故に力ある言語を得んとせば先づ吾等の感情を養ひ、講究せんとする問題に己が頭腦を接觸せしめ、之に對し相應の感情を惹起せしめなければならぬ。實際の感情なくんば、情熱の語も何の効果を奏せざるのみか、反て反對の結果を生ずるものである。されば說教者が學ぶべき一大事は、感情に熱せざるに體裁又は演述法に於てのみ熱心を擬してはならぬと云ふことである。

他の重大にして極く有勝な誤解は、辯論全體に亘り、同一樣の勢力を維持せんと努むることである。「著者たるものは有ゆることに同樣に

技巧を施し、華かにして勢力ある文體にて全篇同調に述べんとする野心を愼まなければならぬ。此忠告に從はざるが爲に虎を畫て狗に類することが度々ある。青年文學者が優麗にして活氣ある數行の文章を賞讃するの餘り、之を己が模範となし、己が作る文の全體悉くを同樣に優麗にしなければならぬと努むるより、反て全體を平凡に終らしむるのである、且つ嶄然頭角を顯はさしめたならば反つて勢力ある可き文字をも至つて無効果に終らしむるのである。畫の暗黑部を明るくするは、光明の部を暗くすると其結果に於て同一である。兎に角對照が必要。作文に於ても、望通りの目的を達せんとせば其濃淡を巧に配置しなければならぬ」(ホイトリー)。

極く熱烈な體にて話す時には變化が肝腎。體力を强く働かす場合には姿勢を度々變へて諸筋肉を代る〳〵働かしめ、斯くて一部分の筋肉に休息を與へるのである。頭腦を働かすにも同じことである。聽衆にとりても、辯士自身に取りても、永く精神活動の高調を繼續せしむることは出來ぬ。(不自然不健全な場合は例外)。

偖て最も完全なる變化は悲哀若くは熱情より滑稽に移ることであらう。滑稽な著者又は辯士は十中八九までは悲哀の事物を休息の爲のみに使ふ。又之に反して悲哀を破らんが爲に滑稽を用ゐることもある。けれども說教者は何時でも滑稽を交へて聽衆の心を休息せしむると云ふ譯には行かぬ。併し熱烈より再三冷靜にして平易なるものに下り、或は一波一動感情を高めます〳〵之を進めることも出來やう。又其他の方法によりて高めたる感情を己が特種の目的を達するに適當なる範圍內に於て變化することが出來やう。

又體裁の勢力は何によるかと云ふことに關して大なる誤解がある。

カーライルの文體の如く急突にして痙攣を催すが如きものは摸倣の價値のないものである。又技巧に過ぎ勢を誇大にしたる文體ロンヂナスの所謂「崇高ならずして天を突くもの」もある。膨大、空虛、擬勢力を有するも放言に過ぎないものもある。當今の如く活動に過ぐる時代、殊に我米國に於ては針小棒大の言を弄し、最高級の形容詞や、誇大的の用語や、熱烈なる想像を不必要不適當の場所に使用する傾がある。

第四章

體裁の優美

體裁の優美は單に想像より生ずることあり、又想像と情熱との結合より來ることもあるが、共に高尚な趣味に支配されて居るものである。趣味は又感情と判斷とに依て左右さるゝものである。美又は其の反對によりて惹起された感情は無意識に來るものであるが、一定の事物、觀念、若くは言語が果して美なりや否と云ふ判斷は、吾等が之を支配し矯正することが出來るものであつて、我等之によりて判斷する所の內部的標準てふものは無限に進歩せしむることが出來るものである。されば體裁の優美を得んとすれば一方に於ては想像と感情とを養ひ、又他方に於ては己が趣味を高めんが爲に眞に美なるものを深く熟慮

追求しなければならぬ。

辯說に於て優美と云ふことは明白や勢力ほど大切ではない、併し之は極く眞面目な辯說中の事物にも貢獻する所が少くない。眞の優美は勿論其問題と、其機會と、其構案とによりて多少變化を受く可きものである、斯く變化すべきものなるが故に看過すべきものではない、寧ろ熱心に之を研究すべき價値を有するものである。

アリストートルは謂ふた「修辭學の第一文體は詩歌の文體に基て作られたるものであると云ふことはゴルギアスの文體が之を證して居る。今日と雖も無學な人々の多數は此種の辯說家が最も麗しく話す人であると思ふ、されど之は間違て居る、詩歌の文體と散文の文體とは違ふ」。詩人の第一の目的は快感を與へることであるが、辯說家の目的は確信と印象と說得とを與へることである。前者に取りて美は體裁の最も大切なる要素であるが、後者に取りては寧ろ明白と熱心とを次に之を置くべきである。之と稍似たる關係は歷史と小說との間に存して居る。祝賀演說や極り切た辯說などにありては人を喜ばしむると云ふことが重な目的であるが、此場合に於ては詩歌の體裁に一層近いものである。辯說と詩歌の間に存する此大切なる區別をアダム・スミスが舞踏と步行、唱歌と辯說との比較によりて解り易く說明して居る。踊るが如く步み、歌ふが如く話さば實に笑ふ可き事であらう。踊にありては雅致あり律に適ひたる運動を爲す、即ち人を喜ばしむるを「所作本來の目的」とするのである、之と等しく唱歌にありては音律に依りて之を成就せんとするのである。然るに辯說の場合は以上と異ふ。「辯說にありては、其行爲の本來の目的に從つて己が云ふべきことを明瞭に發表す可きことを吾人は期待し又斯く要求するのである。之に

反して歌にありては聽衆は何れも其聲の抑揚と音調によりて樂を得んと思ふて居るのである。歌ふ者は斯く聲を作れりとて敢て咎む可きこととも思はず、我等聽衆は又斯くあれかしと望み且つ願ふのである」。

之と等しく詩歌の本來の目的は人を樂ましむると云ふことである、故に我等が之に要求するところは此目的を上手に達することのみである。若詩歌にして同時に人を敎へ或は行爲を起さしむると云ふことがあらばそは通例其主要目的以外のことである。以上のことは小說及び一般に軟文學と呼ばるゝ所の散文に對しても當嵌る。然るに辯說に於ては既に我等が觀察し來れるが如く、其本來の目的は全く異て居る、即ち確信と說得とを與ふることを先にし、人を喜ばしめ人の趣味を滿足せしむることをば後にすべきである。何時でも、同樣に嚴肅とまでは行かぬとも、何處までも實際的で眞面目なことを目的とする說敎者に取りては、此事が殊に眞である。ヘンリー・ロウヂャースの左の敎訓は普通の演說の如何なる種類のものに對するよりも一層說敎に當嵌つて居る。

「辯士にして眞面目ならんか、我等を喜ばしめん爲め、單にその爲めに詩人の如く己が想像を使用するものではない、勿論他の目的の爲に使用したる適當なる形容が必然快感を與ふることもあらうが、之が爲に例を擧げるときには美と云ふことよりも力と云ふことを常に考へて之を選擇するのであつて、大抵は雅致、優美と云ふ點よりも妥當と云ふ點に人々が注意を拂ふものである、……眞面目なることを云はんとする人は出來る丈け正確と勢力とを以て己が思想を聽衆の心に傳へんと苦心するのみである」。

論じて茲に至れば或說敎者等が裝飾のみを求めて居ると云ふ理由を容易く了解することが出來やう。此人々は己が聖職を誤解し、少なくとも、宜しからざる動機に支配されて居るのである。此人々は聽衆を喜ばしむる事のみを計り、己が事業の重大なること、己が位置の尊嚴なる事とを感じて居ない。恐くは善を爲さんことを心より欲するに違ひないが、人々を益せんが爲に彼等を喜ばしむると云ふことを餘り考へ過ぎて居る。全體多くの聽衆は喜ばさるゝことを欲するものであるが、此人々が家に歸る途中眞理の如何よりも辯士の事、其手眞似などの事を話合ふものであるから、かう云ふ事に重きを置く所の說敎者等は說敎の第一の目的は人を喜ばしむることであると云ふ事を考へる。されど若し人に善を爲さんと切望すれば人を喜ばしむるなどと云ふ考は消失するものである。人の批評よりも重ず可きものは神に對する責任であると云ふ考が高くならば、體裁の美と云ふことを成べく節約して極く適當な場所にのみ之を使用するに至るのである。誘惑にかゝり、多くの人々の賤しき嗜好に投ぜんとする人あらば、人を喜ばさうとしても大抵其目的を達することが出來ぬものなることを記憶すべきである。人を喜ばさうとして奇麗に細工を施したものは敬虔の念篤き者に悲を與へ、智識あるものに嫌惡の情を起さしむるのみならず、己が善を爲さんと努むる所の趣味をも害するに至り、人をして、聞くに堪へざるものであると云ふ感じを起すに至らしむるものである。

これに反し、苦心して美なるものを避けんとして居る說敎者もあるが、これ亦賢いことではない。自然に花をなすが如き思想があるに、なぜわざ〳〵斯の如き思想を斥くるのであるか。知らず〳〵の間に尊

嚴なる裝をなし威風堂々と進むが如き偉大なる觀念もある。又當然光彩を放つべき問題もある。又極く平凡な事柄であるが說敎者が之を使はなければならぬ場合には多少これに美はしき想像を施さば更に感興と注意とを催さしむることが出來やう。大切な眞理ではあるが極有り振れたことで殆んど人々の耳が感じを失ふたものに新光彩を與ふると云ふことは尊む可きことではないか。けれども辯士並に聽衆の注意が眞理に向はずして單に美麗なる服裝にのみ注がれる樣ではならぬ。高尙なる趣味と眞面目なる目的とを有するに於ては斯の如き弊を容易く避けることが出來る。ヴキネーは謂ふた眞に美なるものは外觀上の美にあらずと。

優美を恐るるところの人は生來の美又體裁上の或種類の裝飾と云ふものは必ずしも明白を傷けるものでないと云ふことを忘れて居る。

此人々は美なるものと必要なるものとは自然界に於て屢密接なる關係を有するものであつて、又林檎の花や玉蜀黍の金絲は實に云ふ可からざるの美を有するものであると云ふことを忘れて居る。或說敎などの無闇に想像的な體裁は甚だ不適當であつて、一家族の爲に住宅を造らんことを請はれて四阿を造るが如きものである。併し勿論住宅は便利と快樂とに適すると同時に美しき形態を備へ多少の裝飾を有するも差支はない。

眞の勢力を有すると同時に優美なる體裁もある。熱烈なる感情は大膽なる想像に依らずんば發表することが出來ないことがある。斯の如き想像は勢力の爲に使用さるゝのであるが期せずして美を添へる事にもなる。紅を附けた頰は嘔吐を催すが、健康を進め感情を活潑になさば努めず飾らずして頰は自ら輝き美しき色を呈するものであ

る。これ神が斯く定め給ひしものであるが諸子は神以上の事をなさんとするのであるか。

韻文なると散文なるとを問はず、單に美を飾らんが爲めに他人の語を引用することがあるが、これは決して說教に適當ではない。眞面目なる辯論に用ゐて適當な花は造花ではない。明かに宗教的でないと知られて居る詩人の詩句などを引て裝飾の用に供するは殊に當を得ない。或說教者等がバイロンなどの語を引用するは滑稽の至りである。

體裁の優美は殊に用語、排列、並に形容による。體裁の單純なるものに眞正の優美がある。これ吾等の目當とすべきことではないか。

(一)最も勢力ある用語は屢々之と同時に最も優美である。故に前者を求めて、同時に後者の秀逸を得ることがある。併し之は定則と云ふことは出來ぬ。極く勢力ある言語であつても野卑なるものは避けなければならぬ。說教が方言(スラング)を語つてよいのは極く特別な場合に限る。極悲しい思想は餘り勢ある語で話す可きものではない、寧ろ柔かに述ぶ可きである。其問題に不相應なる壯大な語を使ふことは優美を害する常弊である。勢力ある發表は優美ならざるが故に之を棄べきや否と云ふことに關しては一般原則を與ふることは出來ぬ。これは其場合に從つて定めなければならぬ。極く有力なる演說家の多數は言語の野卑を八釜敷云ふ人々の非難を受て居る。シセロ、バルク、パトリックヘンリー、ウエブスター、ルーテル、ホイットフィールド、其他の如きは此例である。發表を眞に弱くする所の語又は少しもこれに力を添へないところの語は優美に見えるからと云ふても使ふ可きものではない。ジョン・フォスターは其有名なる論文の中に、趣味ある人々が福